幻想のアルカナ

名無しの権兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想のアルカナ

【Ｎコード】
Ｎ４２３０Ｙ

【作者名】
名無しの権兵衛

【あらすじ】
魔術――それは人の願望が具象化した奇跡。狂い求め渇望した己が祈りの結晶。それを揮う者、魔術師と言う。
彼らは己の願いを叶えるために日々生きており、その結果他者に如何なる害が為されようとも微塵も顧みない。彼らはそういう存在であるがゆえに。
これは、そんな彼らが織りなす幻想の物語。

第零話

夜。

街は寂とした空気に包まれていた。

日中は舗装された道路に忙しなく車が往来し、歩道には人の列が途切れることなく行き交い続ける。そんな人波の喧騒と車の騒音が街中を埋め尽くす栄えた都市は、けれどこうして夜が訪れるとスイッチが切り替わったかのように人が消え、音は途絶え、深閑となる。

――ゴーストタウン。

簡易的な例えでこの街の様相を表現するなら、その言葉がもっとも適しているだろう。

そんな死の街を俯瞰する、天を刺さんと聳え立つ摩天楼。その屋上のフェンスの向こう側に、一人の青年が座していた。

金糸のように輝く鮮やかな長髪。見る者を虜にする艶やかな碧色の双眸は、けれどどこか言い知れぬ狂気を秘めており、隙無く造り込まれた完璧なる容姿の造形が彼の不気味さにさらに拍車をかけていた。

彼の名はイモータル。

先日この街――桜花(おうかし)市に来訪した、魔術師である。

彼の視線は、遥か百十数メートル強も下方にある地上のとある風景。ちょうどこのビルの直下付近で行われている、虐殺現場に向けられていた。

「くくっ……滑稽よな。なぜ無駄と知りつつ足掻こうとするのか、甚だ理解に苦しむ……ああ、いやしかしそれも当然か。地を這い蹲る虫けらが何を考えているかなど、私に分かるはずもない」

くつくつと愉快げに喉を鳴らしながら、イモータルの顔が笑みの形に歪む。

一体如何なる術を使っているのか、彼は豆粒程度にしか見えないであろう眼下の惨劇を目睫で観賞しているかのように鮮明に捉えていた。

現場には、彼の魔術によって創生された怪物――妖魔が数匹と、そしてそれらの糧となる贄（にんげん）が五人ほど。

贄（にえ）に選ばれた者らは、まだ二十歳そこらの若者たちだった。男三人に、女が二人。ああ、それだけで彼らが時間を忘れるほど楽しい一時を過ごしていたのだと容易に察することができる。ゆえに気づかなかったろう。いまなおも信じられないだろう。

己れらの命運が、今宵の内に尽きるということに。

――男の一人の腕が、妖魔の爪によって引き裂かれる。

直後響き渡る絶叫。人体の一部を破壊されるその痛みは筆舌に尽くし難く、心的ショックもまた甚大。まず戦とは無縁なこの国の人間では、そのどちらにも耐えられまい。

ゆえに、介錯をしてやる。苦痛の時を長引かせなどしない。だがそれは断じて彼の中にある人としての情の欠片から零れた想いではなく、ただ単に、虫の慟哭など聞くに堪えない不快極まりないものだから。

逃亡も悲鳴も許さない。ただ死ねと――イモータルは思っていた。

主のその意を汲み取り、妖魔が忠実に実行しようとする。

口角が裂けたように開き、獰猛な獣の如く鋭い歯牙が血を寄越せと未だ倒れて呻吟する男へ向けられる。

男は、友である他の贄らに助けを乞おうとするが――しかし、この世に己が命より重い友情など存在するはずもなく、必然の如く他の贄らは負傷した男を見捨て……いや、それどころか囮にして逃亡を図った。

だが、男は怨嗟の言を吐きはしなかった。けれどそれはその男が何も殊勝な性格をしていたわけではなく、何のことはない単に逃げた贄らもめでたく捕まったというだけのこと。

無窮の闇に一際大きな叫喚が迸る。だがそれももう数瞬もすれば

消えるだろう。
しかし悲鳴は消えず、しかも轟いたのは贄のそれではなく――
「……ほう？」
イモータルの目が細まり、口元が緩む。
妖魔が、ほんの一瞬きの間に消滅していた。
何と不可思議な現象か。あり得るはずのない事態だ。が、それでもイモータルの笑みは消えない。いや、それどころかむしろ濃く深くなっている。まるで想定外の状況を娯楽としているかのように。
「魔術師、か。ふむ。まだ年端もいかぬ幼虫風情にしては、中々どうして、やるではないか」
虐殺現場に颯爽と現れたのは、まだ十を越えたばかり程度だろう幼い少女だった。だがその手には少女にはそぐわない西洋風の両刃剣が握られている。そして、その剣でもって少女は妖魔を消滅させたのだ。あれがただの剣でないことは、もはや言うまでもないだろう。
「成熟していない虫を潰すのはいささか主義に反するが、まあ良い。無聊の慰め程度にはなろう」
イモータルはそう呟き、ゆっくりと腰を上げた――その刹那。
「――ボケが。テメェの遊び相手はオレだよ」
突如背後から、嘲りの言が飛んできた。
直後に轟音。それは銃声。夜闇を照らすほどの凄まじいマズルフラッシュを生じさせて銃口から射出された弾丸――都合三つのそれ

が彼へと放たれていた。
だが。

「ふむ……虫がもう一匹紛れ込んでいたか」

イモータルの体を穿つはずだったその三連の弾丸は、しかし彼が着ているローブによって全て弾かれていた。
特段それが常軌を逸した鋼硬度のローブ――というわけではない。現にいまも、風に吹かれてゆらゆらと揺れている。されどそのローブがただのそれではないということは、如何な痴愚でも思うまい。
なぜならば、そのローブの両腕部分からは黒色の蛇のような触手が生えていたから。

「へえ……それがテメェの幻装具(げんそうぐ)かよ。また奇怪だなァ、おい」

ため息交じりに呆れたような声が響く。

それに対し、イモータルは。

「虫けらが。誰と比肩している気でいる？」

ローブの触手がフェンスを破壊し、粉砕されたフェンスの残骸が中央付近にいた不遜なる賊へ飛んでいく。こんなもの、イモータルにすれば児戯に等しい稚拙な攻撃だが、しかし先に加減をされている以上、まずはその借りを返しておかねばならない。ああ、つまり両者互いにこれは挨拶代わりの一撃、というやつだ。

「おっとぉ、危っぶねえ」

事実その通り、賊はあっさりとイモータルの初撃を躱してみせた。

己が銃撃を衣服如きに防がれたことも、吹き飛んできたフェンスにもまるで動じていない。その顔に浮かぶのは飄逸（ひょういつ）の笑みのみ。この彼も、イモータルとは別の意味でまた人間的に壊れていた。

「意外と沸点低いんだな、お前。カルシウム足りてねえんじゃねえの？」

賊がイモータルを煽り始める。それもいま時のチンピラですら相手にしなさそうなあからさまな挑発を。

しかし――

「良かろう。それほど死に急ぐというのなら、疾く死ぬがいい」

彼は誰よりも独尊の魔術師だ。己れが絶対であり、自分以外の者は皆嘲弄する玩具か踏み潰す虫けらか、あるいは破棄するだけの塵でしかない。ゆえに、そのような矮小な者らが自分と同じ目線で動き口を利くというだけで不快甚だしかった。生かしてはおけない。

季節は冬から春へ移り変わり、直に桜が咲こうとしている。けれどいまこの時においては空気が痛みを伴うほど冷たく凍りついていた。その原因、言うまでもないだろう。イモータルが放つ零下の殺意、それである。

常人ならば即座に震え慄くであろう絶対的な死。それを前にして、あにはからんや、賊は一層愉快げに笑みを深めた。

「勝手に決めんなよ。オレは、微塵も死にたいだなんて思ってねえんだから」

「知らんな、貴様の意志など。虫は虫らしく、踏み潰されて死ぬがいい」

「ハッ――」

「――ふん」

両者の顔が引き裂けたような狂笑に変わった、その直後。

人外の化物が跋扈する地より遥か上空で、魔の道を突き進む異能者たちの戦いが始まった。

第一話

人生において、人がもっとも輝きを放つ瞬間とは、やはり死する刹那だろう。

たとえば、重篤（じゅうとく）な病を患い余命いくばくもない人間がここにいたとする。そんな人間が、己が運命に悲憤慷慨するのではなく、懸命に生きて――そして散り逝く様は多くの人々に感動を与えるのではあるまいか。否とは言えまい。事実そのような人間を題材とした物語は数多く存在するのだから。

限られた時間を生きるからこそ、その死（おわり）は美麗なものとなる。そしてそれは、物語の中でのみ通用する概念ではない。現実でも、立派に生き諸人を魅了した偉人たちは数多くいよう。人々の生きる指針となった者らは幾多といよう。

であれば、やはり死は美しい。

ゆえに、彼女は――不破朔夜（ふわさくや）は死に呑まれかけている者に手を差し延べはしなかった。

「あ、がっ……た、頼む……助けて、痛いんだよ……っ」

眼下から、呻吟と懇願が入り混じった声が聞こえてくる。

冷たい地に伏しているのは、二十歳そこらの青年。一体何があったのか、全身傷だらけで血に塗れている。トラックにでも轢かれたのだろうか。

そんなことを思いながら、朔夜はガードレールに腰かけ先程向かいに在る自販機で購入したコーヒーを一口。青年の必死の願いにも、まるで意に介していない。ただその深淵のような無感情の黒瞳で彼を見下ろしている。

「は、あ……誰か、来て……」

もはや朔夜にどれだけ乞うても無駄だと判じたのか、青年は他の者に救済を願い始めた。が、時刻はすでに零時を過ぎている。加え、最近この街――桜花市では連続殺人とやらが頻発しているらしいのだ。そんな物騒な事件が起こっているのだから、人気が失せた時間に出かける者などまずいまい。

「ああ……」

と、そこで朔夜は思い至ったように呟き、

「おまえ、例の殺人鬼にやられたのか？　災難だったな」

まさに他人事のように訊ねた。

しかし青年は、弱々しく首を横に振って。

「ば、化物、に……」

とそう返答してきた。

化物。化物？　と朔夜は小首を傾げる。件の殺人鬼は、人間ではないというのか。なるほど、最初の事件から一月経ったいまもまるで警察が成果を挙げられていないのは、そういう理由からだったのか。

「へえ……化物が相手じゃ、警察も大変だな」

どうでもよさそうな口調で呟く朔夜。けれど、彼女とてこの街にいる以上いつ襲われるやも知れない身だ、決して他人事ではない。

が、それでも朔夜は動じない。殺人鬼・化物が潜む街。時刻はそれらが活発になりそうな闇の時間。そしてそれらに襲われたという

瀕死の青年が一人。そんな常人ならば恐怖でパニックに陥りそうな状況に立たされているというのに、微塵も心を乱さないのは一体どういうことなのか。
それは言うまでもなく瞭然。
彼女が死を是とし、美と認識しているから。ゆえ、恐怖という感情が無いのだ。
端的に言ってしまえば、人として壊れている。つまり異常者というやつだ。そんな人間に共感を求めても徒労に終わるだけ。
この青年が不運だと言うのなら、化物に遭遇してしまったことより、後に出逢ったのがこの生粋の死神たる少女だったことがそうだろう。他の誰かならば、助かるかどうかは別としても、救うために動いてくれたろうに……

「あ、は……づっ」

ゴボ、と口から血の泡が零れ出る。もはや彼の死は秒読み態勢に入ったと、医学知識などない素人の朔夜ですら容易に見て取れる。
しかしやはり朔夜は何もしない。ただただ苦しむ青年を観察――観賞するように見ている。もはや彼に救いなどないだろう。もう半刻と持たぬだろうが、その最期の時まで嘆き続けるしかない。ああ、もしも霊というものが世に存在するのだとしたら、こうした者がそうなるのだろう。
だが、運命の悪戯かあるいは神の慈悲か、奇跡は起こった。

「ん？」

サイレンの音が遠くから聞こえてくる。しかもその音がこちらへ近づいてくる。偶然、ではないだろう。ここには化物に襲われた――らしい――負傷者がいる。その事件をどうやってか知ったとなれば、警察が黙っているはずがない。

朔夜はぐいっと一気にコーヒーを飲み干し、向かいに設置されている自販機、その隣に置いているゴミ箱へ缶を投げ入れて。

「じゃあ、私は行くよ。達者でな」

腰を上げ、その場から離れる朔夜。別段疾しいことなどないのだが、事情聴取だの何だのと警察に拘束されるのは御免だ。面倒臭い。

去り際、微かに聞こえていた青年の呻き声が唐突に止んだ。

それでも、彼女は振り返らなかった。

第二話

瀕死の青年がいた場所から道なりに十数分歩いたが、その間誰一人として見かけることはなかった。街は凍りついたように静まり返り、悄然とした空気が満ちている。まさに死の街そのものの様相を呈していた。

（……化物、か）

あの青年は言っていた。化物に襲われたと。

普通に考えれば、重傷を負い錯乱していたがゆえの戯言――そう取るのが自然だろう。人は未知なるものを求めながら、自分に害する未知だけは頑なに認めようとしない生き物だから。

それは恐怖から生じた感情。誰もが持つ自衛の願望だが、しかし前述の通り、彼女にはそのような感情が無い。ゆえに、信じたとまではいかないまでも、頭ごなしに否定してはいなかった。というより、どちらでもいい、どうでもいいと思っている。そんなものになど、不破朔夜は微塵の興味もないから。

彼女が関心を持つのは、たった一つだけ。

しかし、その願望は人類という種の大半に受け入れられないもの。ゆえに、彼女は常に無聊していた。特にここ十年はそうだ。誰一人として、彼女の存在を認可した者はいなかった。というより、不破朔夜という人間が生まれて十八年、その間彼女の存在を認めたのは、たった一人の少年だけだ。

実は彼女、一度この街からちょっとした事情で離郷しており、そして帰郷したのがつい一月半ほど前。つまり、ちょうど彼女が戻った直後辺りに、この連続殺人が起こり始めたのだ。不幸と言えば、不幸だろう。彼女は特に何も感じていないが。

ともあれ、事件が起きてなお彼女がこのように夜間に出歩いてい

るのは、十年前唯一彼女を認め、そしてその在り方に共感し合えた少年を探しているがゆえ。
だが、十年振りに帰郷し、いの一番に彼が当時住んでいた家宅へ訪れてみれば、そこには別の家族が住んでいて、当の本人は未だ行方知れず。もしかしたらもうこの街にはいないのかもしれない――というより、家を売り払っていることを鑑みれば、そうと考えるのが自然だろう。
しかし、それでも彼女は探していた。別に彼に恋慕していたわけではないが、会えるものなら会いたいと思っている。

「……あいつは、どこにいるんだろうな」

そして何をしているのか。
そんなことを思いながら、朔夜が無人の街路を行っていると――何処からか悲鳴が聞こえてきた。続いて獣の咆哮にも似た絶叫、そしてトドメとばかりに銃声が夜闇に轟く。

「……今夜は穏やかじゃないな」

音源はここからそう遠くない。つまりこの付近に異常が在るということ。それを察したならば、直ちに逃げるが道理だろう。余程の痴愚でもない限り、その判断を下すはず。が、しかし朔夜はその選択をしなかった。
その理由は……

「まあ、ヒマ潰しにはなるか」

同じことの繰り返しはさすがに飽いてしまう。たまには別の刺激も欲しい。そんな理由で、彼女は食人の化物の下へ向かおうとしていた。

もはや愚かと言うにもおこがましい、極大の異常者の思考である。
急ぐでもなく、躊躇うでもなく、自然な足取りで朔夜は狂気の源泉へ進んでいく。気のせいか、先程まで何でもなかった空気が、突如として冷たく感じられた。しかしそれは別段気温が急激に下がったのではない。似て非なる全く別のもの。そしてそれに、彼女は覚えがあった。――否、慣れ親しんだものだった。
錯覚ではない。もうすぐそこに、それがある。
そして、開けた街路の角を曲がった瞬間――果たして異常が不破朔夜を出迎えた。

「はあああああああっ！」

最初に聞こえてきたのは、少女の叫び声。けれどそれは悲鳴ではなく、他を威圧するような気合いの籠った喚声である。
だが、その程度ならばまだいい。仮にこの場に殺人鬼たる凶悪犯がいたとして、襲われた被害者が決死の覚悟で迎え撃っている――別段あり得なくない話だ。しかし、実際は違った。確かに闘争はいま起こっているが、しかしその渦中にいるのは、一体どういうわけなのか、まだ十歳前後の幼い少女だった。
髪を横で括り、白いパーカーにフリルのスカートを履いている。そこまでは特段変わりないただの子供と同じ服装だが、けれど唯一にして決定的に異なる箇所が一点あった。

（剣……か。いま時の子供は、物騒な物持ってるんだな）

そう。少女の手には、如何にも西洋製のものだろう剣が握られていた。むろん、少女の体は年相応に華奢で、あんな物を振り回せる体躯ではない。しかしそれを言うなら、そもそもあのような幼子が、熊のような体躯を持つ人外の化物と戦うということ自体がすでにあり得ない話であった。

しかし、その常識を嘲笑うかのように少女の剣戟は化物――妖魔を一刀の下に斬り伏せ、次なる獲物へと放たれる。妖魔の丸太のような腕から繰り出される拳は、当たれば人間など容易く押し潰せるほどの大威力を有している。にも拘らず、少女は臆することなく果敢に間合いを詰め、掻い潜って股間から脳天へ剣を斬り上げ斬殺した。それが一匹二匹ではなく、朔夜が訪れてからのわずかな時間だけでも、すでに五匹以上の妖魔が討たれている。実に怪奇的な光景だ。

「……」

ちらりと、視線を移す。少女のすぐ後ろには、幾人かの若者がいる。恐らく先の悲鳴はあの連中のものだろう。そしてあの少女は彼らを守っていると、そういう状況。

少女の実力は妖魔を遥かに上回っており、次々と屠っている。

ゆえに現状の問題は、少女の背後にいる連中。彼らは逃げず、いまなおも震え慄いている。どうやら腰を抜かしてしまっている模様。内一人は腕を引きちぎられているらしく、激痛を訴えていた。それが連中の恐怖心に拍車をかけているのだろう。

本来ならば、少女が妖魔共の足止めをしている内に動ける朔夜が彼らを救うというのが道理なのだろうが、生憎と彼女はそんな全うな精神の持ち主ではない。すでに傍観の決を下してしまっている。むろん目的は……言うまでもないだろう。

「いつまで保つかな」

道路脇に停められていた車に腰かけ、朔夜は呟く。

少女の実力は妖魔共を遥かに上回っているが、しかし多勢に無勢、加えて五つもの足枷に繋がれている。殺られるのは時間の問題だ。

それを直感的に慄いている連中も察したのだろう、腰を抜かした

まま、這うようにして各々逃避を始めている。が、しかしそれは――

「危ないっ！」

逃げようとした獲物をさせまいと、妖魔の一体が連中に襲いにかかる。彼らの行いは、ただ無意味に妖魔共を刺激するだけに終わってしまった。

だが、少女はそのことに対する咎めの言葉すら発さず、目睫の妖魔すら度外視して彼らの救出に向かった。その際、相対していた妖魔の爪によって肩を抉られたが、まるで頓着していない。一心不乱に彼らの下へ疾走し――

「こ、の――っ！！」

――一閃。

真一文字に振るわれた剣戟が、いままさに連中を殺さんとしていた妖魔を真っ二つにし、間一髪のところで救出することに成功した。だがそれで喜ぶのはバカだけだろう。事態は何も変わっておらず、むしろ少女が負傷したことでより悪化している。片腕を使えなくなった少女がどこまで戦えるか――まあ五分保てばいい方だろう。

朔夜のその推察の通り、数分と経たずして少女は劣勢に立たされた。妖魔の数は軽く五十を越えており、たとえ少女が十全の状態であったとしても、これら全てを打破することは難しかったろう。そこへこの負傷、もはや趨勢（すうせい）は決したと言っていい。ここから逆転などできはしない。

そう朔夜は判じたが、しかしそこでふと疑問が生じた。

――あの銃声は、一体どこから？

妖魔も少女も、むろんの如く足枷の連中も銃など持っていない。

となれば、これは……

と、次の瞬間――突如上方から連続して銃声が轟いた。反射的に

朔夜がそちらを見上げると――

「いぃやっほォ――ッ！」

――空から、奇声を上げて少年（バカ）が降ってきた。

手にしている身の丈ほどもある大鎌を壁に突き刺して落下速度を調節し、かと思えば壁を蹴り飛ばして横へ飛び、道路脇に停められていた車をクッション代わりとすることで無事着地した。道路脇の車――つまりは朔夜が腰かけていたそれである。

「っ……」

咄嗟に飛び退くことでどうにか難を逃れたが、あのままだったら確実に大怪我していた。事実緩和台とされた車は、屋根が潰れ、フロントと窓のガラスが割れ、車体全体が悲惨なほど拉げてしまっている。どうやっても修理はできまい。この車のオーナーが明日これを見れば、大いに嘆くこと間違いないだろう。

まあ、しかしそんなことはどうでもいいとして、だ。

「ハハッ、人間やりゃ何でもできるモンだな。高さ百メートル地点からの縄無しバンジー、震えたぜ」

文字通り命を投げ捨てるような危険と言うにも生温い行為をしておきながら、少年には死の恐怖も生の安堵もまるでなかった。ただ愉快げにくつくつと喉を鳴らし、笑っている。

明らかな異常者だが、しかしそれはこのようなデタラメ極まりない行為をせずとも、一見しただけで大抵の者は彼がそうだと判ぜられるだろう。

なぜなら、その完全に色素の抜けた白い髪に右頬に施された赤いトライバルのタトゥーと赤い薄手のロングコート、そして両手にそ

れぞれ握られた大鎌と大型の回転式拳銃（リボルバー）――という、まさに異常が服を着たような出で立ちをしていたのだから。
と、妖魔が一斉にこちらを向く。
これほどの大音響を撒き散らす派手な登場をしたのだから、それも当然だろう。そしてこれも当然の如く、その場にいた朔夜もまた妖魔の目に触れてしまった。

「……最悪だな」

ため息交じりに呟く。
ただ事の顛末を眺めているだけでよかったのに、当事者になってしまうとは。まあ、だからと言って特に問題はないのだが、つまりは面倒極まりないということ。彼女は観賞する側であって、当事者になることを望む者ではないのだ。
それもこれも、わけの分からない登場をしたこの男のせいである。
朔夜が何か言いたげな目で少年を睨むと、ちょうど車から降りた彼と視線が交わった。
整った顔立ち。けれど性格の悪さが表に出ているので三割減。加え、相手を小バカにしているような薄笑いでさらに三割減――その残念な顔に、朔夜は見覚えがあった。

「おまえ……」

と朔夜が少年に何か言う前に、

「覗き見は趣味悪いぜ、美人さん」

余計な世話言を吐き、そのまま標的も見ずに腕だけそちらへ向けて発砲。ぞんざいに放たれた弾丸は、しかし驚異的な命中精度でもって少女の周りにいた妖魔――都合五体の頭蓋を穿っていた。

彼の手に収まっているのは、Ｒａｇｉｎｇ　Ｂｕｌｌの文字が刻まれたマグナム銃、それも世界最強の一つに数えられるＭ五〇〇モデルである。それは拳銃にしては強力に過ぎる威力を有するゆえ、発砲の際の衝撃も尋常ではない。あまり連射すれば、腕が痺れ字を書くことすらままならなくなり、最悪脱臼、骨折まであり得る怪物級の銃器だ。断じて脆弱な日本の小僧が、それも片手で撃っていい代物ではない。

にも拘わらず、それを為した少年は激甚な反動に悶絶するどころか顔色一つ変えていない。やはり常人の域から彼は逸している。

「さて、と。おーい魅優（みゅう）、引き上げんぞ。その荷物、邪魔だから捨ててけよ」

緩慢とも言える動作でシリンダーをスイングアウトさせ、排莢（はいきょう）と装填を行いながら少年が冷酷極まりない指示を出した。が、指示を出された少女――魅優とやらは、周りに妖魔がいなくなったからか、先程までの焦慮が嘘だったかのように反駁した。

「なにが荷物ですか！　わたしたちがすることは襲われている人を救うこと、それが本来の趣旨であって最優先事項です！　っていうか、あなたの方こそ術者討伐はどうしたんですか？　妖魔はまだ消えていないんですけど」

「ああ、まだ屋上にいるよ。どうにも今夜は面倒臭くなっちまってな、やる気失せたわ」

挑むような魅優の問いに、少年は実に飄々と答えた。

「面倒臭くなったって、あなた――」

と魅優が憤慨した瞬間、その怒声を掻き消すように銃声が轟く。

そして刹那の後に破砕音。射出された弾丸は、ムキになって警戒が散漫となった魅優に襲いかかろうと彼女の背後に迫っていた妖魔を撃ち抜いた。

「ま、取り敢えず話は後ってことで、ひとまず逃げようぜ。殿(しんがり)は引き受けてやるからよ」

言いながらさらに引き金を引いて妖魔を屠っていく少年。魅優は何か言いたそうに口を開きかけるが、しかし諍いを起こしている状況でもないと察し直ちに足枷の連中を連れて離脱した。

妖魔はそれを追おうとするが、少年の持つ怒り猛る(レイジングブル)牡牛がそれを許さず、名を示すかの如く幾度も火を噴き妖魔を滅殺していく。

弾の排莢と装填、そして発射までに要する時間はおよそ三秒。驚異的な速度だ。五十口径のマグナム弾がほぼ間断なく放たれ続けている。その結果、如何に足枷があったとは言え魅優が手こずっていた妖魔の群れは、三十秒と経たずして全滅していた。

「ハッ、楽勝」

「殿が敵全滅させてどうするんだよ」

消滅していく妖魔を見下ろしながら居丈高に言う少年に、朔夜は呆れたように吐き捨てた。

「ああ、あれは建前だよ、お前と二人きりになるためのな」

それはどういう意味なのか、とは朔夜は問わなかった。ゆっくりと上方――この妖魔共を使役していたと思われし術者がいる屋上を見上げ。

「だとしても、ここからは離れた方がいい。面倒なのが動き出そう

としてる」
「あらら、鉄鎖で縛り上げてやったっつーのに……やっぱぶっ殺さねえと止まんねえか」
そう言ってバツが悪そうに頭を乱雑に掻きながら、
「ンじゃ、行くか――朔夜」
彼女の手を引いて、どこへ行くかも告げずに夜の道を歩き出した。

第三話

イモータルの行動を抑えんと必死に絡み付いていた鉄鎖が、断末魔の如き甲高い音を撒き散らして瓦解していく。

鉄の束縛から解き放たれ、自由となった彼は、ローブに付着した砂埃を軽く手で払い、次いで辺りを見渡す。当然誰もいない。数分前までイモータルと戦い、そして一瞬の間隙を突いて彼の体を拘束した奴は、どういうわけか千載一遇、絶好の気を手にしたにも拘わらずそれを逃避に使用した。――いや、正確には逃避ではあるまい。あれの目は恐怖に怯えているそれではなかった。

であれば……

「ふん。下らんな」

大方の察しはついているイモータルだが、しかしそれゆえに、あれの取った行動は下らぬと断じた。曲がりなりにもこの崇高なる己と剣を交えた敵手だというのに、それがあのような愚行を取るとは何事か。もはや釈明など不可能。直ちに即殺せねば気が収まらない。

だが。

「この付近にはもうおらぬか。逃げ足だけは速い。ああ、奴は虫ではなく鼠の類であったか」

くっくっと一人含み笑うイモータル。彼のいる屋上は凄惨の態を為しており、コンクリートの地面や壁はいくつも陥没し、給水タンクには巨大な穴が穿たれ、何があったのかフェンスは半分以下の高さまで切断されていた。

このことから、彼らの戦いが激烈なものだったことは瞭然だが、しかしその当事者であるイモータルは微塵も相手を認める敬意の念

を抱いていなかった。如何な実力者だろうと、彼は絶対に他人を認めない。なぜなら己こそが至上の存在だから。己と比するは世界(かみ)のみ。それ以外は全て取るに足らぬ虫に過ぎぬと、イモータルは欠片も迷わず認識している。その傲慢、その極大の独尊は、世が世ならば偉大なる覇王として民草に信奉されていたことだろう。

しかしいまはそんな時代ではない。たとえ仮初だろうと、世界は恒久的安寧を目指して平和を謳っている。ゆえ、暴君など不要。疾く切除されるべき人類の癌でしかない。

先の虫けらは、それを成そうとする度し難い愚者の一人。

それを取り逃してしまったイモータルの心境たるや、筆舌に尽くし難い赫怒によって腸が煮えくり返るが如く――というわけでもなかった。

「それにしても、まさか逃げられるとは思わなんだな。いささか甘く見過ぎていたか」

殺すと決めた相手に逃げられることなど、一体何十年振りだろうか。それも動きを封じられて悠々と撤退していった者など、まずこの百年の内では起こり得なかった事態だ。すなわちこれは、百年に一度起こるかどうかという奇跡に等しい珍事。常勝の日々を生き、死に恐れ慄く塵芥ばかりを相手にしていた彼からすれば、憤激より嬉々の念が勝るのも無理はあるまい。

「この街に来たのは正解だったな。少しは楽しめそうだ」

贄もそうだが、何より興味を惹かれる玩具を見つけた。ああ、己が昂揚しているのが分かる。あれは殺す。他の誰でもなく自分が。この手で。嬲り砕き潰し裂いて喰らい殺すのだ。

今宵は、その光景を想像することで無聊を慰めるとしよう。

「せいぜい逃げ回れよ鼠。私を失望させるな」
眠りに就いている街を一望し、イモータルは凄惨な笑みを浮かべてそう呟いた。

◆◆◆

戦場と化していた表通りから脱した朔夜らは、どこへ行くでもなく道なりに遁走した結果、時代の流れに取り残されたような古色蒼然とした枯れ果てた公園に行き着いていた。
朔夜はそこのベンチに腰かけ、少年は滑り台に上って彼女を見下ろしている。やはりバカは高い所が好きなのだろう。
そんなことを思いながら、まず一言。

「そんな所にいちゃ、話もできないだろ」
「ならお前がこっち来いよ。オレ、疲れて動けねえし」

意地の悪そうな笑みを浮かべてそう答える少年。確かに、彼は何やら妖魔を率いていた術者と戦闘していたらしいので、疲れもあるだろうしもしかしたら体のどこかに傷を負っているかもしれない。……外見上では全くそうは見えないが。
しかしどう見てもあの滑り台は子供用ゆえ大人二人は入れない。無理矢理に入れば可能だろうが、そもそもそこまでして傍にいたいとは思わない。よって、朔夜が下した決はこう。

「ならこのままでいいよ。私も動くのは面倒だから」
「ンだよ、張り合いねえな。ふざけたこと抜かしてんじゃねえよボケ、くらい言えねえのかよ？」
「言ってほしかったのか？」
「そりゃもちろん。美人の言葉攻めとか、むしろご褒美だからな」

ケタケタと、わけの分からないことをのたまって笑う少年。正直彼の言うことは理解の範疇の外だったが、まあいい。深くは考えまい。

そんなことより、と朔夜は言って。

「まるで変わってないな――遊路（ゆうじ）」

「ハッ――」

その名を紡ぐと、少年――遊路は屈託なく笑いながら。

「ンだよそりゃ？　褒めてんのか貶してんのか、どっちだよ？」

「……半々、ってところ。可もなく不可もなくってやつだよ」

「ああそうですか。そういうお前は――」

そこで一度言葉を区切り、遊路はわざとらしく下卑た目をして。

「まァた美味しそうに育っちまって……取り敢えず今からここで一発、どうよ？」

などと、最低過ぎる下劣な言葉を吐いてきた。

それに朔夜は、呆れたように、疲れたようにもう一度ため息を吐いて。

「……覚えとくといいよ、遊路。女は雰囲気を大事にする生き物だって」

誘い方も低劣ならば選んだ場所も最悪だ。一体どこにこんな薄汚れた廃公園で抱かれて喜ぶ女がいるというのか。

残念至極――通常の女性ならばそう思ったことだろう。特に日本

人はロマンスを好む性質があるゆえ、離れ離れとなっていた幼馴染と十年振りの再会――という如何にもなシチュエーションに弱い。殊更女はその傾向が顕著で、知らず自分が物語のヒロインであるかのような錯覚に陥り、相手が三十億人以上いる異性の中でもっとも素晴らしい人なのだと勝手に思い込んでしまう。

そして、いざ再会したとなれば、現実とのギャップに辟易してあらゆる感情に醒めてしまう。女とはそういうものだ。

が、しかし朔夜はそうした者らとは違い、いまの遊路に幻滅するようなことはなかった。

なぜなら、先程彼女自身が言った通り、彼は昔と何ら変わりなかったからである。久我（くが）遊路は、昔からこのように下品で性格のねじ曲がった男だった。

敢えて変わったところと言うならば……

「ところでその髪、どうしたんだ？　昔はまともだったのに」

十年前は、日本人らしく彼も黒髪だった。それなのに、いまは完全なる白。染めでもしない限りこうはならないだろうが、それにしても白にするというのはどういう感性か。チンピラならチンピラらしく、それらしい色があるだろうに。

そんな朔夜の素朴な疑問に、遊路は。

「別に染めてねえよ、オレ。っつか、染髪剤効かねえんだよ、オレの髪」

だからここから別の色にすることもできないのだと、彼は言った。

それに、一瞬だけ怪訝な表情を朔夜は見せたが、しかし直後に「ああ……」と得心したように頷いて。

「魔術師になると、体が奇形になったりすることもあるんだったな。

昔見たよ、腕が四本あったり三つ目だったりした奴。おまえもその口か？」

いまさら、朔夜は遊路に魔術師なのかどうかと問うようなマネはしなかった。そんなもの、訊かずともあの戦いを見れば痴呆でも理解できるだろう。

「おぉ。ある日突然、目が覚めたら髪真っ白――たまげたね、さすがに。まあ別に気にしてねえからいいんだけどよ」

それはそれでどうかと思うが、まあ本人がそう言うのなら特にこちらが気にかけることもないだろう。別に髪が白くなったからって、体に害が生じるわけではないのだし。

この不可思議な現象――その原因は、魔術の根源たる術者の願望である。その願いがあまりにも強い者の場合、極小の確率でその祈りに沿った、あるいはそれを表した身体に変化してしまうのだ。

つまり、彼は何かしらの強い願望を持っているということになるのだが……

「遊路」

「ん～？」

ライターで煙草に火を点け、紫煙を吐いて一服している遊路に、朔夜は訊ねた。

「おまえ――これからどうするんだ？」

何を願っているんだ、とは訊かなかった。それは彼が狂おしく渇望している祈り、彼の魂の在り方とも言える、不可侵の秘密（アルカナ）だから。

「別に。ただあの野郎ぶっ殺すだけだけど……ああ、まあ今夜ンとこは大人しく帰って寝るさ。今からやり合うってテンションでもなくなったしな」
「ふーん……そういえばあいつ、あのお子様はいいのか、放っておいて？」
「魅優のことか？　だーいじょぶだろ、親の言いつけはしっかり守るガキだから、今頃は良い夢見てんじゃねえの？」

たぶんな、と遊路は言って、滑り台から飛び降りた。実に適当な物言いだが、しかしそれは裏を返せばそれだけ魅優とやらを信頼している証拠。年の差など関係なく、同じ場所に立つ同志と認めている証だ。彼にしては珍しい。

「ずいぶんと可愛がってるんだな。どうりで現れるタイミングが良すぎると思ったよ」

あの時。
魅優は絶体絶命の窮地に立たされていて、もう少し遊路の登場が遅ければ、確実に彼女は死んでいた。きっとあの少女は、自分が死ぬまで足枷共を守ろうとするだろうから。
ゆえに、彼は飛んだのだ。百メートル以上もあるビルの屋上から、魅優を助けるために。

「そりゃあな。実際可愛いだろ？　あいつ。いつかお兄ちゃんって呼ばせるためにも、死なせるワケにはいかねえのさ」

ハッハッハ、と笑いながら己が欲望を吐露する遊路。どこまでも俗物的な男である。

「まあ、おまえのささやかな野望はどうでもいいとして、そろそろ

行かないか？　もうさっさと帰りたいんだけど」

時刻はすでに深夜二時を過ぎている。まともな生活を送っている者なら就寝している時間帯だ。如何な異常者とて、睡魔は等しく訪れる。それは彼女も例外ではない。

「だな。ンじゃ行くわ――っと、その前に携番教えろよ。一々探すの面倒臭せえし」

「そんなのこっちも同じだ。ほんと、おまえは手間かけさせてくれたよ」

「手間？　何が？」

「別に。何でもない。いいから早く携帯出せよ」

こっちはもう出してるんだから、と言って急かす朔夜。それに遊路は苦笑しながら、ゆっくりと携帯――らしきモノを取り出した。

「……なんだそれ？」

朔夜が訊ねる。

「……何だこれ？」

遊路が自問する。

彼の掌にあったのは、ディスプレイ画面のみ。そこから先は何もない。ああ、つまりは――携帯が壊れていたということ。実に無惨に。

「……」

「……」

一瞬の沈黙。そして、

「……野郎とやり合った時か、縄無しバンジーの時か、そのどっちかでぶっ壊れたんだろうな、たぶん」

「だろうな。後先考えないからこうなるんだよ」

まったく、と朔夜はため息交じりに言って。

「じゃあ、私の家に来いよ。ペンと紙くらいあるし、私の番号だけでもメモしてけ」

ここで彼を逃したら、次はいつ会えるかも分からない。それは御免だ。せめて、こちらの連絡先だけでも伝えておかないと。

「だったら今夜泊めてくんね？　オレん家ここから結構遠いし、金ねえし携帯この様だしで、正直やべえんだわ」

「……本当、おまえは相変わらずだな」

現在

いま

という刹那のみを生きている。よくもまあいままで生きてこれたものだ。

朔夜はもう幾度目かも分からないため息を吐きながら。

「いいよ、泊まっても。でもあまり騒がしくするなよ？　あそこ音響くから」

「りょーかい。任せとけよ」

にしし、と悪戯小僧そのものの笑みを浮かべて快諾する遊路。如何に平和ボケした年寄りや子供でも一見で看破できるほど明瞭な邪念を醸し出している彼に、しかし朔夜はもはや何も言わなかった。

言っても無駄だと分かっていたから。

「じゃあ、行くぞ」

「おうよ」

そうして、二人は公園を後にする。

久我遊路との十年振りの再会――それが後にどのような事態を招くことになるか、この時不破朔夜は知る由もなかった……

第四話

願いを持たない人間など一人として存在しない。
ゆえに人の一生とは、つまるところ大なり小なり己が抱いた願望を叶えるための作業に過ぎないのだ。
しかし、万人が皆願いを果たすことなどできるはずもない。願いの多くは、決して手にすることのできない空想であり夢想の類なのだから。
けれど、それならばなぜ人は生きているのか。自身の願いが成就されることはないと知りながら、どうして懸命にいまを生きているのか。
それは己を至福にする、奇跡を待っているから。
そして人にとっての奇跡とは、すなわち願望の具象に他ならない。総じて、その奇跡を人は魔法と呼ぶ。
人の身では干渉することのできない、偶発的な超常現象。ゆえに崇められる一つの神秘。
だが、ある者たちはその魔法を人為的に発現させようと活動を始めた。善悪の是非を問わず、手段の是非を選ばず、悠久の時を重ねて彼らは研鑽を積んでいった。
そうして、魔法を為すための一つの手法が確立された。
それが、魔術。
神秘の位にある奇跡を、人智の域に貶め理論としたもの。
その魔術を行使し得る者を、魔術師と言う。

彼はそんな魔術師の一人で、ゆえに他の何物を犠牲にしてでも叶えたい願いを持つ己が祈りの信奉者。己の在り方こそが至高なのだと信じて疑わぬ異端者である。そして、その度の過ぎる自尊こそが、魔術師になる唯一にして絶対の資格であった。

ゆえ、幼少から唯我独尊を地で行っていた彼ならば、なるほどその素質は多分にあろう。何ら不思議ではない、既定とさえ言える事態だ。
だが、原則として魔術師となった者は、己が願いの成就のことしか考えられない祈りの虜囚と化してしまう。物理法則から逸脱した異能を発現させるのだから、それも当然と言えばそうだろう。しかも人体変様が起こるほど渇望している者なら、その症状は殊更。
だというのに、

「なあ朔夜、下着入れってどこ？」

その人体変様するほど凄烈な願いを持っているはずの久我遊路は、目下己が願望よりも目先の欲望を優先し動いていた。

「見つけてどうする気だ」
「いや別に。いざって時のために、知っといた方がいいって思ってな」
「どんな時だよ、それは」

言いながら、朔夜は遊路の額を軽く小突いた。悪戯好きの子供にそうするように。
その程度の処置ではいささか甘すぎると言えばそうだが、しかし彼がこのような稚拙な児戯に走った理由を朔夜は察している。そしてそのことを少なからず彼女も気にしていた。

「……悪かったな、退屈な所で。おまえが来るってわかってたら、もう少し色々用意したんだけど」
「ンーな気ぃ使わんでもいいって、こっちは泊めてもらう身なんだから。それに、オレは別に退屈だなんて思っちゃいねえし」
「そうなのか？」

「そうなのよ」

即答する遊路だが、ベッドに背を預けぼぅっと天井を見上げるその様は、どう見てもヒマを持て余しているようにしか見えない。が、本人がそうだと言い張るなら、これ以上質すのは野暮というものだろう。

ゆえに、朔夜はこの話題をこれ以上続けるのを止め、別のことを訊ねた。

「ところでおまえ、何でまた魔術師なんかと揉めてるんだ？　ヒマ潰し、ってだけじゃないんだろ？」

彼だけならば、そうと朔夜も思っただろう。だが、あの少女――魅優は違う。無辜の人間を捨て置けない彼女が、ただヒマ潰しという娯楽趣味の延長でこのような殺伐とした戦いに加わるとは思えず、また遊路とも共同戦線を張ろうとするとは思えない。

ならば……

その朔夜の推察の通り、遊路は「おぉ」と首肯して。

「ま、仕事だよ仕事。アホな人間狩るために警察がいるのと同じで、傍迷惑な魔術師をサクッと狩るのがオレらの仕事。ちなみに、それなりに給料はよかったりする」

「なのにいまは金ないのか」

「何か知らんけど、すーぐ無くなっちまうんだよ。不思議だな」

どうせ遊び回っているのだろう。昔も、両親からもらった小遣いを十分と経たず使い切ってしまうような奴だった。その悪癖はいまも直っていないらしい。

「あ、そだ。仕事と言えばお前、明日オレの職場来いよ。あいつら

に紹介してえ」
「紹介って……何でまた」
そんな必要性あるのか――暗にそう問うと、遊路は朔夜の首に腕を絡め、グイッと抱き寄せて、言った。
「そりゃお前、仮にも命がけで共に戦ってる仲間によ、オレの嫁のことを紹介しねえワケにはいかねえだろ？」
「……」
ほんの少しだけ、沈黙の時が降りる。
遊路はチンピラだが、しかし整った顔立ちを持つ彼に、常に無駄に自信に満ち溢れている彼に、このような告白紛いの言葉を告げられれば、まず大抵の女は落ちるだろう。そうでなくとも、赤面や動転くらいはするはず。
――なのだが。
「……それで、このセリフは何の漫画から引用したんだ？」
朔夜は微塵も顔色を変えず、平然と返していた。
「いや、漫画じゃなくて昨日やってたドラマの主人公のセリフ」
そしてこの彼も、また朔夜が間に受けるとは思っていなかったのか、特に動揺することなく説明して見せた。罪悪感など欠片も見受けられず、朔夜も咎めようとはしなかった。
気に入ったキャラの言葉を引用するくらい、誰でもしよう。ただ彼もその内の一人だったというだけで、事実似たようなことを朔夜は十年前にも言われている。初めてではない。
だから、取り敢えずこれだけは言っておくとする。

「あまり女の純情、弄ぶようなことはしない方がいいぞ。本気になった女ほど面倒なものはないんだから」
「ハッ、だーいじょぶだよ。いざとなったらバックレっから」

呵々と笑いながら、そんな最低なことを言う遊路。それに対して朔夜は――やはり何も言わず、感じない。何をどう言ったところで、最終的な決を下すのは彼自身だ。ゆえに、必要以上に彼の行動を制限するようなことは言わない。それに――というよりは、むしろこちらが朔夜の本音なのだが、どこの誰とも分からぬ女がどんな目に遭おうが、知ったことではない。

会話が終わったと察した朔夜は、やおら肩に乗っている遊路の腕を外し、立ち上がった。

「どっか行くのか？」
「風呂。おまえも後で入れ」

それを、遊路は一体どう解釈したのか、真剣に困ったような顔になって。

「え、いや……オレゴム持ってねえよ？　生はさすがにまずくね？」

などと、世迷言を口にした。
それに、朔夜は。

「ばか」

その一言だけを残し、部屋から出て行った。

第五話

「にしても――ほんと何もねえな」

一人取り残された遊路は、改めて朔夜の住まう部屋をぐるりと見渡し――ため息を吐いた。

とあるマンションの一室、その八畳ほどの部屋にあるのは、衣服を入れるためのタンスと寝るためのベッドだけ。本やテレビなどの娯楽物は一切ない。むろん、私室にないのだから居間も同じだ。せいぜい隣接している台所を有効活用するためにソファーとテーブルが置いてあるだけで、他には何もない。さながらモデルルームのよう。綺麗と言えば聞こえはいいが、生活感の欠片もないここは酷く寂寞としている。必要最低限のものしか求めないという、彼女の性質をまさに表したような部屋だ。

「十八のうら若い女がこんなんでいいのか？」

誰に問うでもなく訊ねる遊路。自分を変わっていないと彼女は言っていたが、あの少女の方こそ何も変わっていない。ただ外見が度が過ぎるほど美人になっていることを除いて。

まあ、ともあれひとまずは。

「……一応、連絡しとくか」

言って、遊路は懐から携帯を取り出した。朔夜に見せた真っ二つに割れていたそれではなく、別の機種、傷一つ付いていない仕事用の携帯だ。

遊路はその携帯を操作し、電話をかける。相手は数コールの後に出た。

『もしもし？』

野太い、まさに雄というものを表したような声が鼓膜を蹂躙する。気の弱い子供ならばこれだけで泣き出しかねないその漢（おとこ）の声に、遊路は苦笑しながら、

「チィーッス、おやっさん。起きてっか？」

どこまでも軽い口調で話しかけていた。

遊路のその態度に、電話の主は盛大にため息を吐き。

『お前、今まで連絡もせずに何をしていた？　魅優が心配していたぞ』

「魅優が、ね。ってことは、ちゃんとあいつは戻れたワケだ」

『ああ。お前の帰りを待つと言っていたが、妖魔と戦ったり怪我人を病院に連れて行ったりと、さすがに疲れていたんだろう。先程眠ったよ』

隠し切れない愛情を込めた声で魅優の安否を報せる電話の主に、遊路はそうかい、と適当に返した。電話の彼はともかくとして、遊路の方は最初から魅優の心配などしていない。彼女の実力は本物だ、この結果は当然である。

ゆえに、遊路は速やかにこの話題を終わらせ、本題に入ることにした。

「ンでよ、おやっさん。今から話すことは魅優には黙っててもらいてえんだけど、構わねえか？」

『……いいだろう。他ならぬお前のことだ、それが最良と決を下したがゆえのことなのだろう？』

「ああ。あいつには話さねえ方がいい。水と油――なんて可愛げのある次元でもねえんでな」

不破朔夜は人の死を是とし、天道魅優は人の死を非としている。その両者が互いの願望（アルカナ）を万一知りでもしたらどうなるか、言わずとも明瞭だろう。

それに、そもそもこちらの方が遥かに深刻なことなのだが……

「単刀直入に言うぜ。不破朔夜――あいつが帰ってきてたよ、この街に」

その名を紡いだ瞬間、不動を地で行く漢が驚愕に息を呑んだのが分かった。

そして、信じられない、信じたくないとばかりに、漢は恐る恐る遊路の言葉を反芻する。

『《無謬（むびゅう）の死神》が、帰ってきた……？』

反芻は、しかし微妙に細部が異なっていた。

――《無謬の死神》。

魔道を極めんとする者で、その名を知らぬ者はまずいまい。そしてその名を冠する者が如何なる存在であるのかも。

遊路もそのことは当然知ってはいるが、しかし相変わらず緊張感のない声であっさりと――電話の主にとっては――驚天動地の報せを告げた。

「そんで、明日あいつ連れてそっち行くからよ、歓迎会の用意しといてくれ。久しぶりに奮発してくれよ、おやっさん」

『歓迎会って、まさかお前……あの死神を仲間に引き入れるつもりではあるまいな？』

「あるまいなって、それ以外に何があるんだよ？　今度の相手は一筋縄じゃいかねえ野郎なんだ、最強の札があるんなら使わねえ手はねえだろ」

『……』

提案、というよりは決定事項のように遊路が述べると、電話の主は黙り込んでしまった。しかしそれは焦慮しているがため、というわけではなく、何かを思案しているがゆえだと遊路は察し、釘を刺す意味を込めて続けて言う。

「ああそれと、オレの見てねえ所であいつを殺ろうなんて考えんなよ？　その意味、あんたなら分かるよな？」

たとえ何人であろうと、彼女に手を出す者は許さない――というような生温い感情論の話ではない。一度きりしかない人生、やりたいことをやらず何をやるんだ、というのが彼のモットーであるゆえ、基本的には他人のすること為すことに口出しなどしない。電話の主が朔夜を殺したいというのなら、ああやってみるといい。だがその結果として食いっぱぐれになるのは御免なのだ。だから止めておけと、そういうこと。

そのことについては、電話の主も弁えていた。

『……分かっているさ。俺とて己の分は承知している。だがあれを傍に置くことは反対だ。あれが何を撒き散らす存在か、お前とて知らんわけではないだろう？』

「ああ、だからだよ、おやっさん。あいつは事に直接干渉しなくても、災厄を呼んじまってる。なら、あいつがこの街にいる限り逃げ場なんてねえ。だったら傍に置いておいた方が何かと役立つだろっつー話」

『……』

論を述べると、またも電話の主は黙り込んでしまった。悩んでいるのだろう。悩んだところで解など一つしかないが。

「まあ、ともかく明日連れてくわ。歓迎会の方、よろしく頼むぜ」

そう言って、遊路は携帯を切り懐に戻す。

明日になったら、恐らくは電話の彼から酷い折檻を受けることになるだろうが、まあ、それはいい。人に憎まれるのも恨まれるのも慣れているゆえ、いまさら気にしない。

問題は彼女だ。

昔のように暴走しないかと、ほんのわずかだけ心配になる。いま遊路が連絡手段があるにも拘わらずそれを隠してここにいるのも、全ては彼女の動向、心の機微を監視するためである。

遊路としては、別に誰が死のうがどうなろうが知ったことではなく、それこそが魔術師という在り方の自然体なのだが、しかしそれでも犯してはならない法というものはある。それを破れば、世界はたちまちその者に牙を剥くだろう。彼女がそれだ。誰もに忌まれ、排されるだけの存在――それでもいいと彼女は言うのだろうが、そうなると困る者がここにいるのだ。

柄ではない――そのことは本人も自覚しているのだが、何分、他に適当な者がいないのだから仕方ない。

（ま、そのおかげでこうして美少女の部屋に招かれてんだから、役得っちゃそうだよな）

などとプラス思考で現状を見ていると、ガチャリ、とドアノブが回され朔夜が入ってきた。

しっとりと濡れ艶やかさを増した黒髪。風呂上がりゆえほんのわずかに赤みがかっている肌がどことなく色っぽく、そして何よりも

その身なり、下着の上からワイシャツ一枚というその手の人種を悶殺せんばかりの格好は、実に官能的である。
それを見た遊路は、煽るように口笛を吹き。
「胸でかくなったな。昔はまな板だったのに」
茶化すようにそう言うと、朔夜は頭に乗せていたタオルを遊路の顔面に投げつけて。
「ばかなこと言ってるヒマあったら、さっさと風呂入ってこい」
「あーいよ。ンじゃ使わせてもらうわ」
言って、遊路は立ち上がる。そのまま部屋を出る際、不意に未だ言い忘れていたことがあるのに気がついた。こんなことを言うのはいまさらどうかと思ったが、まあ、いいだろう。
遊路は振り返り、名を呼ぶ。
「朔夜」
何だ、と朔夜がこちらへ目を向ける。相変わらずの無表情。精巧な人形のようにただ美の要素を詰め込んだ人間味の欠片もない端麗に過ぎた無機質な面貌は、昔と何ら変わっていない。
ああ、人によっては不気味で恐ろしい、近づきがたいと彼女を忌避の対象にしてしまうかもしれないが、しかしその恐怖に耽溺している遊路にとっては、不破朔夜という少女は他の何物にも代えがたい存在であった。
ゆえに、伝える。
彼女と再会できた時に抱いた万感の想いを、たった一言に籠めて。
「――お帰り」

第一話

そこは――地獄だった。

凄絶な呵責に喘ぐ男の、女の、老人の、幼子の声が幽暗の闇に間断なく木霊する。それはまさに怨嗟と嘆きに満ちた死の旋律（メロディ）。それを、彼はお気に入りの楽曲でも聴いているかのように心地良さそうに微笑を浮かべていた。

一筋の光も届かぬ闇の深淵。その暗黒の中において唯一輝く金色の髪を持った彼が座するは、人の肉と骨とで構成された死の玉座である。常人ならばそれに触れただけで滲み出る憤怒と慟哭に意識を塗り潰されるが、しかし彼にとってそれは、己を飾る装飾品に過ぎなかった。

そんな彼の眼下では、いままさに人間から妖魔への変生が行われている。髪が一本残らず抜け落ち、肌は爛れ、各器官は膨張と収縮を繰り返す。その痛みたるや筆舌に尽くし難く、まともな人間ならば数分と経たず壊れてしまうだろう。

事実、ここにまともな人間は一人と存在しない。元はただの人間として生きていた者らは、けれど彼の邪法に染められ全く別の存在（モノ）へと変わり果てていた。

これこそが魔術師としての彼――イモータルの使い魔創生術である。

彼に遭遇し攫われた者らは皆ここへ連れて来られ、このような悪辣にして陰惨な実験体として扱われていた。

肉体強度を極限まで高めていき、その過程で生じる激甚な痛みでもって精神を擦り潰し、己が魔術（ねがい）を深層意識の底まで浸透させる。それはもはや悪魔の所業。人の尊厳を剥奪する外道の為せる業であった。

「甘美だ。だが足りん。もっと哭(な)けよ貴様ら、所詮それしかできん虫であろうが」

ビクビクと体を痙攣させる男を蹴飛ばし、嗚咽を洩らす女を踏みつける。彼には他者に対する情など微塵もない。己以外の生物は全て卑賤なる虫けらと認識している。ゆえ、老若男女の区別なく、平等に自身の悦のためにその命を奪い消費させるのだ。

まさに悪魔のような――その表現が正しく符合する存在が彼であった。

イモータルはいましがた変生した使い魔――妖魔をざっと見渡し、

「ふむ……此度できた虫は三十と少々、か。他は全て失敗。使えんな、実に」

呆れ果てたように切り捨てた。

何の価値もない無為な生を送り、死んでいく人間共。だが彼らは己が生に何かしらの意味を求めている。ゆえにイモータルはその意味をくれてやった。世界(かみ)に愛された至高の存在である自分――その無聊を紛らわせる玩具としての意味を。

だというのに、その玩具にすらなれぬ虫以下の者らが存在した。存在し、その者らを視界に収めてしまった。実に不快であること甚だしい。

「塵が。ならば最初から喋るな、動くな、疾く失せろ」

言い捨て、パチン、と指を鳴らした。瞬間――地から無数の妖魔が這い出し、一斉に妖魔となり切れなかった不適合者へ襲いかかった。

「――――――――」

絶叫が轟く。剥き出しとなった神経のまま、彼らは爪と牙を突き立てられているのだ。その激甚なる痛みは人の許容を遥かに超えている。耐えられるはずもない。

やがて悲鳴が小さく、弱々しいものとなって消えていく。だがイモータルの意識はもはやそちらには向いていなかった。

捨て終えた塵に関心を持つ者などいないだろう。それと同じだ。

いま彼の内にあるのは、わずかな、けれど久方ぶりに感じる昂揚。

何十年と塵と虫しか見ていなかった彼が、ようやく遊べる玩具と出会えたのだ。そして此度の玩具は、中々どうして歯応えがある。あれならばこの飢餓を満たしてくれるだろう。

そして、戯れるためにはまずその玩具を見つけるところから始めなければならない。が、イモータルはその行為に如何ほどの労力を注ぎ込むことになろうと躊躇いはなかった。それはこれまでの彼ならばあり得ないことだ。世界と己を除く万物全てを塵と断ずるイモータルが、他者を特別視するなど。

ゆえに、楽しみなのだ、彼は。

あの玩具が一体どれほど己を楽しませてくれるのか、甚だ興味がある。

期待は無限に広がっていき、胸の奥が熱く煮え滾る。膨れ上がる破壊衝動は際限知らずで、思考は全てあの玩具のことのみ。

ああ、俗的に言うならば、これは恋というやつではなかろうか。イモータルはあの玩具を何よりも誰よりも凄烈に求めている。

ゆえに、だ。

「失望させてくれるなよ。塵であったなら、死に勝る苦痛を与えてやる」

その貴族然とした秀麗な顔を禍々しい陰惨な笑みに歪め、イモータルはやおら指をパチンと鳴らした。

それが合図だったのか、闇の空が突如二つに割れ、そのまま暗黒の世界は捲られるようにして一瞬の内にどうということはないビルの屋上風景へと塗り替えられた。

そう。いましがたまで彼がいた場所は、イモータル自身が魔術によって編んだ結界の中だったのだ。ゆえに何者にも見つけられず、仮にそこにいることが露見したとしても、まず手出しなどされない。いや、正確に言えば手出ししても意味がない。何せ位相のズレた空間は、もはや？異界？と何ら変わりないのだから。

おもむろにイモータルはいまし方生誕したばかりの妖魔共に視線を投げ、

「行け、虫共。我が飢えを満たす玩具（おもちゃ）を見つけ出してくるのだ」

主君として号令を下すと、即座に妖魔たちは主の命に従い四方八方へ飛び去って行く。

時は黎明。地平の果てから零れる陽の光は祝福のそれではなく、これより始まる恐怖劇（グランギニョル）の幕開けを告げていた……

第二話

正午を過ぎた頃、ようやく起きてきた遊路に軽い食事を提供した朔夜は、そのまま眠気から覚めた彼に連れられ街に出ていた。

どうやら昨日彼が言っていた職場とやらに向かっている模様。紹介なんて下らない真似はしなくていいのに、どうしてもするのだと遊路は言って聞かない。こうなった彼はもう止まらないと過去の経験から分かっている朔夜は、言われるがままついていくことにした。それにまあ、正直な話丸きり興味がないというわけでもないし、一つヒマ潰しと考えればこれも悪くはない。

「着いたぜ。ここだ」

と、不意に遊路が言う。

連れてこられた場所は、日中でも人通りの少ない街の腸とも言える路地裏。まるでここだけ時が止まっているかのように、時代の流れに乗り栄えた表通りとは異なる一昔前の古めかしい造りの店々が連なっている。

その中で一際年季を感じさせる店――駄菓子屋『橘商店』の前で、遊路は足を止めていた。

「ここがそうなのか？」

「おぉ。狭くて汚いとこだけど……ま、お前は気にしねえだろ？ンなこと」

「まあ、それはそうだけど」

言いながら、朔夜はもう一度目の前に鎮座しているそれを見た。

駄菓子屋である。何の変哲もない、どこにでもありそうな駄菓子屋。そこが魔術師たる遊路が務める職場などと言われても、すぐに

頷けるはずもないだろう。率直に言えば信じられない。が、ここがそうだと言うのなら、ともあれまずは中に入ってみないことには話にならない。
中に入る。店内は薄暗く、埃っぽい。そこら中に陳列されている駄菓子の類も、どこか適当に置いているような感じがして猥雑然としていた。駄菓子屋というのはなぜどれもこうなのだろうか。いや、小奇麗な駄菓子屋もそれはそれで気味が悪いのだが。
と。
「おやっさーんッ、来たぜ――！」
唐突に遊路が、恐らくはこの店を経営している者だろう名を呼んだ。
すると。
「何だ、もう来たのか、遊路」
奥の間から、のそりと二メートル近くもある大男が出てきた。
ざんばらに切られた短髪に、Tシャツを張り裂かんばかりに盛り上がらせている岩のようにゴツゴツと凹凸（おうとつ）のある筋骨隆々たる肉体。右目には革製の大きな眼帯が巻かれており、さらに足は喪失しているようで、ズボンの裾から金属とプラスチックで構築された義足がわずかに見える。過去に事故にでも遭ったのだろうか。
そんな彼をしばし朔夜が見ていると、
「ゴリラみてえだろ？　このおっさん」
などと、遊路が場の空気を一切度外視した発言をかました。
「ほぅ……俺を前にしてよく言った。ならばむろん減給される覚悟

はできているのだろうな？　遊路よ」

ゴキゴキと手の骨を鳴らしながら、柔和な口調で恫喝する大男。これがそこいらのチンピラならば即座に財布を差し出していたであろうが、しかし。

「ハハッ、ジョーダンだよジョーダン。ンなマジになんなって。器が知れるぜ、おやっさん？」

遊路は微塵も動揺することなく、相も変わらない飄々とした態度で受け流した。

だがまあ、大男の方も遊路がこのような反応を取ることは判じていたようで、特段咎めるようなことはしなかった。ああ、これは彼らなりの挨拶のようなものなのだろう。何とも分かりづらいが。

「紹介するぜ、朔夜。このおっさん、オレの上司の――」

「……橘剛毅（たちばなごうき）だ」

大男――もとい橘とやらが、遊路の言葉に引き継ぐようにして名乗る。しかし、その声音は無垢な子供ですら容易に察せるほど明瞭たる排斥の念を孕んでおり、朔夜に対する敵愾心を感じさせた。

むろん、朔夜には彼に恨まれる覚えなど微塵もない。橘剛毅とは初対面なのだから。

しかし――もはや当然とも言えるが――やはり彼女は、橘に敵意を向けられても毛ほども意に介していなかった。

こちらも相変わらずの淡々とした口調で、己が名を紡ぐ。

「不破朔夜。まあ、よろしく」

そうして形だけの挨拶を済ませると、そのまま奥の間へと案内さ

れた。どうやらそこで話をするらしい。その際、遊路は店内の駄菓子を無断で食べ、橘にゲンコツを食らって悶絶していた。

ほとほと、空気を読まない男である。

第三話

店内の奥にある橘の家宅、その居間に招かれると、そこにはすでに先客がいた。言うまでもないだろう、遊路の同僚、魅優（みゅう）である。

横で一纏めにした髪型が特徴的な、リスのように愛らしい小動物然とした顔立ちの少女は、現在ソファーにて就寝中。スヤスヤと可愛げのある寝息を立ててお休み中だ。

それを見た橘は、場所を変えようかと思案を始めていたが、しかし――

「おら起きろよ、いつまで寝てんだクソガキ」

躊躇いも容赦もなく、遊路は魅優を蹴り飛ばし文字通り叩き起こした。

ズダン、という鈍い音が居間に木霊する。

そして数秒後。

「痛った……え、え？　……なんですか、なんなんですか……？」

床に落ちた時に鼻でも打ったのか、鼻頭を押さえて涙目になりながらキョロキョロと辺りを見渡す魅優。まだ意識が覚醒していないらしく、状況が呑み込めていないようだ。が、遊路はそんな魅優の頭を鷲掴みにし、左右に乱暴に揺さぶって放り捨てた。

そして、一言。

「目ぇ覚めたか？」

「……えぇ、目覚めましたよ、目覚めましたとも……あなたへの殺意に」

「ハハ、そりゃ重畳。いつでも来いやガキ」

頭を揺さぶられ吐き気を催しているのか、魅優は口元を押さえてふらふらと足下が定まっていなかった。が、それでも橘と、そして見知らぬ他人がこの場にいることを視認した魅優は、何かあると踏んだのだろう、一度だけ遊路を尻尾を踏まれた猫のような目で睨みつけ、彼とは正反対側のソファーへと着席した。

それを見て、橘が口を開く。

「魅優、彼女は朔夜さんと言ってな、遊路の知人だそうだ。そしてこの子は天道魅優。幼いながらも、遊路の相棒を務めている子だ。実力は確かだと言っていい」

言われ、朔夜は魅優を観察するように見つめる。それに何を感じたのか、魅優はビクリト身体を強張らせて固まってしまう。他人に見つめられることに慣れていないのだろうか。

まあ、そんなことはどうでもいいとして。

「結局、私は何で連れてこられたんだ？」

遊路の隣に腰を下ろしながら、自分をここへ連れてきた張本人たる彼に訊ねる。あらかたの予想はついているが、けれどそうであるのなら最初に言ってくれればいいものを。わざわざ黙って連れてくることに、一体何の意味があるというのか。

そうした彼女の意を遊路は感じ取ったのか、苦笑しながら。

「ンーなおっかねえ顔すんなよ。まあ、ご察しの通りお前に仕事手伝ってもらおうとは思ってたけどよ、何もそれだけのために連れてきたワケじゃねえんだから」

それはどういう意味なのか、と朔夜が怪訝な顔をすると、遊路は。

「ま、それは後のお楽しみっつーことで、取り敢えずはさっさと仕事の話しちまおうや」

と言って、橘に仕事の資料を持ってくるよう要求する。上司をそんな顎で使っていいのかと思ったが、まあ、橘はあの体ゆえ戦闘では役に立たないことは自明。ならばせいぜいこうした裏方の仕事をこなすくらいしかやることはなく、また本人もそのことを十分理解しているようで、嫌な顔一つせず遊路の注文に応じていた。

ほどなくして資料が届けられる。三方あるソファーの中心、居間の真ん中に置かれているテーブルに資料たる書類は置かれ、朔夜はやおらそれに手を伸ばした。

その資料には、これまで巷を騒がせている殺人鬼に殺された者の写真や、死因について仔細に記載されており、そこから殺人鬼――魔術師の戦術諸々の予想データが載っていた。

そして最終ページ、推測ではなく確定と断じるように、一人の魔術師の名がそこに刻まれていた。

「へえ……」

それを見た朔夜は、驚いたように、喜ぶようにわずかに声を弾ませる。

だが、これは彼女が常人とはかけ離れた感性を有しているがゆえの反応であり、本来ならば驚愕し絶望するが自然。それほど、この資料に挙がっている魔術師の名は危険に過ぎた。

「《円環の蛇》イモータル――知ってるよこいつ、聞いた名だ。確か『冠名（かんめい）』持ちの中でも不老不死ってことで有名だった」

《円環の蛇》――朔夜がその名を紡ぐと、橘と魅優は揃って顔を曇

らせた。如何に魔術師と言えど、彼ら二人の感性は常人の域にある。ゆえに絶望……とまではいかなくても、イモータルの名は朔夜のように嬉々として受け入れられるものではなかった。

そう、彼ら二人には。

「ああ、テンション上がるだろ？　昨日の遊び程度じゃまだ全然底は見せてもらえなかったけど、でもありゃそこらの魔術師（オモチャ）とは別格だ。とんでもなく強ぇよ」

そう嘯く遊路の表情は、彼女以上に喜悦の色に染まっていた。彼もまた、朔夜と同じく常人の感性から逸した異端者である。加え、その感情の振幅は朔夜よりも遥かに激しい。気を抜けば、いますぐにでも暴れ出しかねないほどに。

「でも……不老不死の敵をどうやって倒すんですか？」

と、それまで黙していた魅優が不意に誰ともなく訊ねた。

確かに不老不死――何をやっても死なないのであれば、なるほど勝ち目など皆無だろう。たとえ実力で勝っていようとも敗北は避けられない。そして負けはすなわちこの街の死都化を意味する。

イモータルは情け容赦など微塵もしない。ただの一人と残さず、この街に生きる全ての人間を殺し尽くすだろう。

それをどうやって防ぐのかと、そう魅優は問うているのだ。勝てない相手に、どうやって勝つのかと。

それに、遊路は。

「さあな。適当に刻んどきゃその内死ぬだろ」

至極どうでもよさそうに、投げやり気味にそう言った。

「なんでそんなにいい加減なんですか！　もっとちゃんと考えないと、みんなが……っ」

死ぬだろうと、暗に魅優は叫んだ。死ぬ、という部分を口に出さなかったのは、なまじ魔術師ゆえにその生々しさを知っているからだろう。そして同時に、人が持つ命の尊さを理解しているからだろう。

だから、ロクに考えもせずに安直な答えを出す遊路に食いかかったのだ――と、朔夜は読み取った。

それに――知らず唇が緩み、笑みの表情を形作る。笑み、というにはあまりにも淫靡で魔的なものだったが。

「……なにが可笑しいんですか？」

嗤笑に近い表情を浮かべる朔夜に気づいた魅優が、わずかに怒気を孕んだ声で問うてくる。彼女にすれば無辜の人々を救いたいという己が祈りを侮辱されたようなもの。黙っていられるはずもない。

魅優に明確な敵意を向けられた朔夜は、しかし依然として笑みを崩すことなく。

「いや別に。ただ遊路が言ってた通り、おまえは可愛いなって、そう思っただけだよ」

そう、微塵の他意なく答えた。

だが魅優はまだ納得できないのか、朔夜を睨むことを止めず、秒単位で彼女の敵意が膨れ上がっていく。このままではそれが殺意へと転じるのも時間の問題だ。

だが。

「はいはーい、人の嫁に噛みつくのはそこまでにしようなァ、ガキ」

ベシン、と小気味の良い音が居間に響く。
直後。
「痛ったあああああああああああああああああああああっっ！？」
絶叫を上げて魅優がまたもソファーから転げ落ち、額を押さえて床をのた打ち回り始めた。その原因、わざわざ問うまでもないだろう。遊路のデコピン、それである。
「な、なにするんですかぁ～」
目尻に涙を溜めて魅優が恨めしそうに訊ねる。それに遊路は、ポケットから取り出した煙草に火を点け、ゆっくりと紫煙を吐いて。
「心配いらねえよ」
「ふぇ？」
キョトンとした顔で遊路を見つめる魅優。一体何が大丈夫なのか、まるで分かっていないのだろう。
しかし構わず遊路は続けた。
「勝敗云々はどうあれ、この戦いであの野郎は死ぬよ。それは絶対だ。間違いねえ。――なあ、朔夜？」
人を小バカにしたような、それでいて含みのある笑みを浮かべて、遊路は朔夜に話を振った。
「ああ。死なない存在（もの）なんてないよ。生まれたものは、すべからく死ぬべきだ」

それが道理だろう？　と彼女は付け足した。それくらいの常識、いま時子供だって理解していると。
それに、橘は嫌悪と畏怖を混ぜ合わせた拒絶の表情を浮かべ、遊路は零れそうになる笑いを必死に堪えていた。
そして、何が何だか分からず頭の上に疑問符を浮かべている魅優を見やり。

「とまあ、そういうワケだからよ、大船に乗ったつもりで安心してな」
「いや……結局どういうことなんですか……？」
となおも訊ねてくる彼女に、遊路は「直分かるよ」、と言ってこの話題を強制終了させた。魅優にとっては重要なことでも、彼にとってはこの話はどうでもいい些事に過ぎない。本題は別にある。

「さて、と。ンじゃおやっさん、いっちょ支度始めるとしようか」
「何だ、もうやるのか？　まだ昼だぞ」
「だからだよ。夜は蛇探しっつー仕事がある。やるなら今しかねえのさ」

遊路がそう言うと、橘はなるほど、と得心したように首肯し、台所へと向かう。一体何が始まるというのか。

「なにするんですか？」

朔夜に代わってそう問いを投げたのは魅優だった。子供だからか、思ったことがすぐ口に出る性質らしい。
訊かれた遊路は、その問いを待ってましたとばかりに最大の笑みを浮かべて。

「――歓迎会（パーティ）だ」

第四話

魔術師とは、己が願望の成就のためならば他の全てを犠牲にすることも厭わない狂気（いのり）に憑かれた者らの総称。程度の差はあれ、彼らは自身こそが唯一至高の存在であると考えており、ゆえに他者は同列の存在ではないと認識している。

しかしこのような思考を持った者は、何も魔術師だけに留まらないだろう。一般人の中にもそのような自己愛者はごまんといる。ただその中で魔術師たる彼らが特別害悪としての象徴とされているのは、ひとえに歪んだ精神だけではなく、一種の超常的な異能を行使できるがゆえなのだ。

彼らも人間。なるほど、ならば如何に異能を有していようともやり方次第では警察らでも殺すことは可能だろう。だが、それを行うに当たっての労力が甚大に過ぎるのが問題なのだ。加え、犯罪は魔術師が起こすものだけとは当然限らない。その中で、膨大な人員を費やしてたった一人の魔術師（にんげん）を捕まえる――ああ、非効率甚だしいにもほどがあろう。

ゆえに、それぞれ国ごとで魔術師の対処法を考案しているのだが、その中でこの国日本が取った策は、魔術師には魔術師をぶつけるという、至極正当なものであった。

目には目を、歯には歯を、魔術師には魔術師を――というやつだろう。

むろんその法を決行する場合は雇った魔術師に安くない報酬を払う必要があるが、出し渋ることはできない。さらに、これは当たり前の話だが、傲岸不遜の塊である魔術師がそう簡単に国の狗になり下がるはずもなく、結果国の守護を誓った者は十といなかった。

そして、桜花市『橘商店』――もうお分かりだろう。この駄菓子屋の店主、橘剛毅は、国と契約を交わした少数の魔術師の一人なのだ。もっとも、彼自身は五年ほど前に負った傷が原因で戦えない身

となってしまったが、けれど代わりにその手足となる者らがいる。戦力的に見れば、個人の時より遥かに増していると言えるだろう。
だが不幸なことに、此度桜花市に現れた魔術師はそれでも勝てるかどうかという相手だった。
その原因の一つに、冠名が挙げられる。
冠名とは、高位の魔術師に与えられる一種の称号、あるいは悪名のようなもので、それを得る者は皆等しく災禍級の実力を有していると言われている。
取り分けその中でもイモータルという冠名持ちの魔術師は、不死であることで名を馳せている。つまり、他を寄せ付けないズバ抜けた実力を持ちながら、さらに死なないという不条理極まりないアドバンテージを持つ存在なのだ。
此度『橘商店』の面々が挑むことになった相手がそういう存在である以上、如何に数的に有利であろうとも楽観など到底できるはずもない。
――のだが。

「お、それもう焼けてんじゃね？　もーらい」
「遊路、それまだ焼けてないぞ。ひっくり返してみろ」
「へーきへーき。案外焼け切ってねえ方が旨かったりするんだって」
「体壊しても知らないからな」

彼らは、そんなかつてない脅威の存在などまるで意に介さず、朔夜が橘商店に就職したことを祝って焼肉パーティ――橘の家宅で――などを開いていた。
と言っても、盛り上がっているのは主に遊路だけで、主役たる朔夜は彼に絡まれているだけに過ぎず、他二名は完全に蚊帳の外。ただ重々しい表情で淡々と食事をしているだけで、歓迎会を楽しむどころか朔夜の加入すら認めていないような風情だった。
しかし、そんな二人の空気に気づいていないのか、または気づい

た上でどうでも良しとしているのか、朔夜と遊路は二人だけで会話と食事を楽しんでいた。

「あ、おい朔夜、その肉はオレんだぞ」
「え、いや……これは私が焼いたやつなんだけど」
「ハッ。ンなモン知るか、よっと」

遊路はすでに朔夜の箸に挟まっている肉を己の箸で引っこ抜き、口の中に放り込む。

「おー、旨ぇ」
「……」

罪悪感の欠片もなく感想を洩らす彼は、まさしく魔術師の典型と言えるだろう。

その一方で、せっかく焼いた肉を奪い取られた朔夜は、しかし特に憤ることもなく次の肉を焼き始めていた。しかも二枚。今度は最初から遊路の分まで焼こうというのだろう。なるほど、自分のことしか考えていない彼とは違い、良妻のように気が回る少女だ。

（――なんて思いませんけどね）

黙々と肉を食べながら、対面に座る朔夜を睨みつけるは魅優である。

彼女は、端的に言えば不破朔夜という少女が大嫌いだった。ゆえに、仲間とは認めていない。というより、ある日いきなり現れて、今日から仲間になるからよろしく――などと言われても、すぐに受け入れられるはずもないだろう。まあ、それでもお人好しに過ぎる魅優ならば、あるいは表面上だけでも仲間として認め、礼を尽くした態度を示したかもしれないが……朔夜に対してだけはそれができ

なかった。
特に理由などない。ただ単純に、生理的に彼女を受け入れられないだけだ。
ゆえにいますぐにでも追い出したいのだが、けれど遊路がそれを許さない。聞けば彼らは幼馴染の関係にあるらしいが、まさか……
（いや、遊路さんに限ってそんなことは……）
ないだろうと、魅優は思う。
まさか久我遊路が不破朔夜に惚れているから、ただ傍に置きたくて大局を見誤ってしまっているなど。
しかしそうは思っても、遊路が朔夜を特別視しているのは瞭然だ。幼馴染以上の感情を持っていることは明白。問題は、その感情が何なのかだが……
「……、」
魅優は朔夜をじっと見つめる。それだけで息を呑んだ。あまりに美しすぎて。
腰ほどまである癖のない真っ直ぐな濡れ羽色の髪に整った柳眉と長い睫毛、刃のように鋭い切れ長の瞳と、綺麗な鼻梁から滑らかに走る小さな口元へのライン。モデル顔負けの均整の取れた身体は、まるで生きた女の教科書のよう。そしてジーンズにジャケットというラフなスタイルも身長が高い彼女には見事にマッチしており、女性が持つ華やかさや儚さとはまた違った凛々しさとミステリアスな雰囲気を彼女は持っていた。
ああ、客観的に総評すれば、彼女は間違いなく美女だ。仮に遊路が惚れていたとしても何ら不思議でない事態だろう。
けれど、それとこれとは話が別だ。如何に惚れたからといって、それで何も見えなくなってしまうような愚物はいらない。そして、

久我遊路という男はそんな愚物ではないと信じている。
ゆえに。
「あの、遊路さん……ちょっといいですか？」
「んー？」
まだ不破朔夜が自分たちの仲間として正式に加入し切っていないいまここで、白黒ハッキリとつけるべく天道魅優は問うた。
「お伺いしたいんですけど、どうしてこの人を仲間に入れたんですか？」
「ンだよ、不服か？」
「理由がわかりません。ただでさえ相手は未曽有の強敵……足手まといは不要です」
足手まとい、という言葉はさすがに言いづらかったのか、か細い声で魅優は、しかしハッキリとこの展開に不満だと告げた。
それに、遊路は。
「ま、そうだろな。お前にしたらこの展開は不愉快極まりねえだろうよ」
「だったら――」
いますぐその女をここから追い出せと、魅優は目で訴える。嫌な予感がするのだ。彼女、不破朔夜という存在が、何かとんでもない災厄を招きそうな気がして――
だが。
「けど、そりゃダメだ」
「どうしてですかっ！？」

問いは、悲鳴に近かった。
やめてくれと、失望させないでくれと。
魅優は、遊路を尊敬している。むろんそんな事実を明かすことなど生涯あり得ないが、しかし異常者なりにも?道?を弁えている彼はまさしく尊敬に値する人物だ。だからそんな彼の片腕を務めていることに誇りを持っている。
なのに……と。
そんな魅優の悲痛な訴えを受けて、遊路は答える。相変わらずの飄々とした態度で。

「こいつが必要だからだよ。こいつがいれば間違いなく勝てる」
「そんな保証がどこにあるんですか！」
「保証はオレだ」

返答は即答だった。微塵のブレもない。常にいい加減な言動、態度ばかり見せている彼は、しかしその心はまさに不動であった。
しばしの間沈黙が続き、そしてややあって。

「ま、あれだ。試験みてえなモンだよ。首級が合否判定基準っつーな」
「ダメだったら……どうするんですか？」
「どうもねえよ。死ぬだけさ」

平然と、当たり前のように遊路はそんな衝撃的なことを口にした。

「……、」

もはや、魅優は反駁（はんばく）できなかった。遊路を説き伏せられる言葉がどこにも見当たらなかったから。

ふと、朔夜を見やる。敵を殺さなければ自分が死ぬと宣言されたにも拘わらず、彼女はどこ吹く風、微塵も気にかけず淡々と肉を焼いていた。

そして。

「遊路、肉焼けたぞ」

その一言でもって、形だけの歓迎会は幕を閉じた。

第五話

黄昏の光は美しい――誰もがそう思うだろう。
地平の底に沈み行く陽の光は儚く、ゆえにその刹那の輝きは人々を魅了する。
だが、黄昏とはすなわち逢魔(おうま)が時。
人を殺し喰らう悪鬼羅刹が動き始める無明の到来の報せなのだ。

その羅刹、《円環の蛇》と謳われる彼は、未だ黎明時と同じ場所にいた。と言っても、何もしていないわけではない。日の出から現在にかけて、街中に使い魔たる妖魔を飛ばし、自身が殺(あそぶ)すと決めた玩具を探していたのだ。
三百年以上の時を生きている彼はこれまで実に数多の人間を見てきたが、しかしその中でもあの玩具の外見は上位に位置するほど覚えやすく見つけやすい。恐らくこの街――この国規模で見てもあのような目立つ特徴を持つ者は二人といないのではあるまいか。
にも拘わらず、件の玩具を見つけたのはほんのつい先程。あれの性格からすれば人の多い表通りにいるものと思っていたゆえ、使い魔にそちらを重点的に探させていたのだ。盲点と言えばそうだろう。
まあ、ともあれこうして見つかったのなら費やした労力も報われる。徒労に終わらなかっただけで良しとすべきであろう。
結局、玩具がいたのは人気の少ない路地裏にある褪せた商店だった。
そこには玩具の仲間と思われる虫ら三人がおり、何やら話し合っている。
現在イモータルは烏に擬態している使い魔と視覚を同調させており、文字通りその場にいるような感覚で玩具らの動向を覗き見ていた。さすがに壁に遮られた音は妖魔であっても拾えず、且つあまり近づけば連中に見つかる恐れがあるゆえ行えないが、しかしわざわ

ざ聴覚を同調せずともこうして見ているだけで玩具らが何を話しているか、イモータルにはあらかた分かっていた。
読唇術、と呼ばれるスキルだ。それをイモータルは身に付けていた。とは言っても、望んでそうしたのではなく、単純に長く生きているがゆえに自然とそのスキルが身に付いただけなのだが。
しかしこのような時には存外にそれが役に立つ。むろん全て看破できるというわけではないが、断片的な単語からでもある程度のことは読み取れる。ああ、いまはイモータルがどこにいるか――という話をしている模様。特に熱を上げているのが幼い虫けらと隻眼の虫だ。この二人は街の地図を広げ、これまでの事件を鑑みてこの己れが次にどこへ現れるか予測しようといるらしい。何とも度し難い痴呆共だ。
そこはあの玩具も同じことを思ったのか、呆れたように苦笑しながら無駄なことは止めろと言わんばかりに首を横に振った。やはりこいつは分かっている。この身がどこへ行くか予測し得ることなど不可能だと。
なぜなら己の行動に法則性などないから。浮浪し、見つけた虫を贄とし、糧とするだけ。そこに理由などありはしない。ただそこにいたから、という以外は。
言うなれば事故のようなもの。それこそ未来視でもない限り、イモータルの行動はまず予測できないだろう。
ゆえに、イモータルはまずは玩具の前にあの二人を殺すことにした。如何にわずかと言えども神にも等しい存在であるこの身の未来（さき）を、たかだか塵芥と同列の虫けらが知ろうなどとおこがましいにもほどがある。断じて生かしてはおけない。
そうしてイモータルが使い魔と視覚の同調を切り、直ちに出陣しようとした、その直前――不意に一人の少女と目が合った。
「――――――」

一瞬、イモータルの顔が凍りつく。あり得ないものを目の当たりにしたがゆえに。
そう。これはあり得ない。あり得ないことなのだ。
彼と視覚を同調させている使い魔。あれは、諜報に特化させている妖魔ゆえ、戦闘能力は皆無に近い。ああ、その気になればそこらの虫けらでも殺すことは可能なくらいに。だが、その分だけあれは隠れ潜むことに長けている。事実この三百年、魔術師の相手をしたことは数え切れないほどあるが、ただの一度としてこの妖魔の存在を看破されたことはなかった。
だというのに……

（気づいた……のか？　この私に……？）

イマイチ確信が持てない。ただ窓の外の景色を眺めているだけ――ということも十分あり得る。というより、そちらの方が可能性としては極めて高い。
見つけられるはずがない。見破れるはずがない。この《円環の蛇》イモータルがそう決を出しているのだから。
しかし、次の瞬間――見下すように、侮蔑するように、少女は嘲りの笑みを浮かべた。
直後。

「ガッ――――――！？」

一瞬、輝く花弁のようなものが見えたと思ったら、その刹那の後に使い魔が破壊され、無理矢理同調を切断されてしまった。

「な、あ……」

一体何が起こったのか。

己が視界（セカイ）に帰還したイモータルは、しかししばらくの間動けなかった。強制的に同調を引き剥がされたことによる後遺症、というわけではない。ただ、その行為をされたという事実にただただ呆気に取られていたのだ。

「何だ、あの女は……」

墨のように黒い髪と、雪のように白い肌を持つ女。この現象をあれが引き起こしたと決めつけるにはいささか早計だが、しかし……

「……っ」

あの少女を脳裏に浮かべると、不意に、胸中に何かが湧いた。

それが一体何で、どういうものなのか、彼の知り得る言葉では説明できない。なぜならこの三百年の生の中で、一度として体験したことがないものだから。

まるで見えない凍りついた手に心臓を撫でられているような、そんな不快極まる感覚。

知るか知るか知るものか――――

こんな感情（もの）は不要。

イモータルという存在が完全である以上欠落も獲得もあってはならず、またあり得ない。ゆえにそれを乱そうとするバグは、早急な排除が必要だ。

「――殺す」

発せられた声は、かつてないほどの確固たる意志と殺意が籠められていた。

そして、背後に群れている単なる娯楽の一環として生み出した己が使い魔を見やり。

「こんなものを戦力とするのは甚だ屈辱だが、いいだろう。歓べよ虫けら共、貴様らに力を与えてやる。その力でもって、あの玩具(おもちゃ)以外の害虫を速やかに滅殺しろ。存在の欠片も残すな」

その号令は絶対。抗うことなどできはしない。

ゆえに、妖魔は次々とイモータルの魔力を分け与えられ、その力を飛躍的に上昇させていく。その力、数値化するならばおよそ五倍相当。それが約三十といるのだ、絶望とはまさにこのことだろう。

「では――行くとしよう」

ローブを翻らせ、歩み出す。もう先程感じた不快な何かは消え去っていた。

陽は完全に落ち、世界は再び暗黒へ。

その無明の始まりと共に――《円環の蛇》イモータルは出陣を開始した。

第六話

名ばかりの歓迎会を終えた後、『橘商店』の面々は今後の方針について話し合っていた。

まずは今夜のこと。昨夜遊路との戦いによってそのプライドを些少なりとも傷付けられたイモータルがこのまま黙っているとは思えない。何らかの行動は見せるだろう。となれば、余計な犠牲が出る前にイモータルを見つけなければならない――のだが、しかし未だイモータルの根城を特定できていないのが現状。ゆえに切り込むことはできない。

辛うじてやれることは、根拠のない推測くらいだ。

テーブルに街の地図を広げ、これまで彼の魔術師が現れた地点に印を付け、そこから一種の法則性がないかを調べる。結果は――言うまでもなく惨敗。その場の気分で動いているかのようなデタラメ極まりない行動ということしか分からなかった。

橘は国に仕える魔術師であるため、様々な形で国の助勢を受けることができる。その一つがイモータルに関する資料だ。これまで彼が世界各地で為してきた悪行諸々を此度の事件と見比べることで敵の正体を掴むことができた。ああ、その情報は確かに一個人でどうにかなるものではなかったゆえありがたかったが、しかし肝心要、その敵がいまどこにいるのかという根本的なことが分からない以上、後手に回るのは必然。

先程から橘も渋い顔でじっと地図を見つめるばかりで、一言も発さなくなった。恐らく色々と頭の中で検討しているのだろう。彼はそういう人間だ。

遊路は、煙草を吸いながらぼぅと天井を眺めている。一見何も考えていなさそうな態だが、彼もまた今後のことについて思考しているはず。この彼が本当に何も考えていない時は、何もしないのではなく何かを始める時だ。それがないということは、きっと何か手が

ないか探しているに違いない。
そして最後の一人。不破朔夜。
彼女のことはまだ会ったばかりゆえ深くは知らないが、けれどそれでも断言できる。
この人は――真実何も考えていないと。

「……、」

密かに拳を固め、奥歯を軋ませながら天道魅優は退屈そうに窓の外などを眺めている朔夜を睨みつけた。むろん反応はない。恐らく気づいてはいるのだろうが、特にどうでもよいので捨て置いている、といった風情だ。
こんなにも皆が真剣だというのに、どうして彼女はこうも無関心なのだろうか。いや、確かに彼女はまだ仲間に加わったわけではないし、いきなり人助けが仕事だから親身になれと言われても、現実にはそうすることなどできはしないだろう。
でも、だからといって無関心で良いというわけでは断じてない。もしどうしても本気になれないというのなら――

「……あの、やる気がないなら帰ってもらえませんか？　邪魔なので」

普段の己ならば絶対に言わないことを口にする。どうしてか、この人だけは認めてはならないと本能が訴えかけてくるのだ。
そんな魅優の痛罵に、朔夜は。

「ああ、悪かったな。ちょっと外に虫がいたからさ」

見てたんだよ、と悪気の欠片もなくのうのうと答えながら、視線をこちらに戻した。が、依然としてその顔にはやる気のやの字も見

えない。むしろどこか眠そうに見える。
それが、魅優の怒りの導線に火を点けた。
「虫なんかどうだっていいでしょうっ！？　わたしたちは命賭けてこの戦いに臨んでるんです、あなたも少しは――」
真剣になれと、魅優はそう叫んだ。
遊路の話を真に受けるのならば、彼女はイモータルを倒せるほどの力を有していることになる。それなのに何もしないなんて間違っている。こうしているいまも無辜（むこ）の人々が苦しみ死んでいるのだ。それらを救う力があるのなら救え――それが人というものだろうと。
だが、朔夜はそうした魅優の切実なる想いに対して。
「ほんと可愛いな、おまえ。男だったら惚れてたかもしれない」
ははっと、他意なく可笑しそうに笑っていた。
「このっ――」
自然、魅優は憤懣（ふんまん）する。思わず飛びかかりそうになったが、しかし橘に目で制されどうにか落ち着きを取り戻した。少なくとも表面上だけは。
しかし、その仮面もすぐに剥がされることとなる。
「ま、でも正直無駄だと思うよ、この会議は」
「な――」
何を言うんだ、と反駁する前に、朔夜は続けた。
「いや、無駄って言うよりは、意味がないって言った方がいいのか。

どの道敵の居場所もわからないのにあーだこーだ考えるのは徒労だよ。そんなこと考えるヒマがあるなら寝てた方がいい」

そろそろ限界が近い。

如何に魅優が魔術師だからと言っても、所詮はまだ子供。自制には限界があるし、その臨界点は橘や遊路よりも遥かに低い。特に、相手が彼女であるのならなおさらに。

だが朔夜は、そんな魅優の心情を余所に結論を出した。

「要するにさ、放っておけばいいんだよ。勝手に向こうから来るのを待ってればいい。闇雲に動いて不意打ち突かれるよりは、万全の態勢で迎撃した方が勝率は上がるだろ」

「それはつまり……遊路さんを囮に使うってことですか？」

声を震えさせながらも、どうにか言葉でもって応じる魅優。それは彼女の自制心が怒りに勝ったと言うより、それ以上に疑問が強かったから。

彼女と遊路は幼馴染であり、互いが互いをそれなりに想っている――ということくらいは、幼い魅優であっても分かる。が、にも拘らず朔夜は遊路をエサにしてイモータルを釣ろうと言うのだ。正直、何を考えているのかまるで分からない

その魅優の質疑に、朔夜は相も変わらない平然とした声で応答した。

「そっちの方が上策だろ」

「上策って……もしイモータルが遊路さんを狙わなかったらどうするんですか？　いや、そうでなくても、探す過程で多くの人が襲われる。それはどうするんですか？」

「動いたとしても人は死ぬ。同じだよ」

「ですから！　イモータルが遊路さんを狙って動く保証がどこにあ

るんですか！？　もし相手にされてなかったら、無駄に犠牲者が出るってことになるんですよ！？」
「大丈夫だよ。あいつはすぐにでも来る。ああ、今夜にでも飛んでくるんじゃないかな？」
「そんな根拠がどこに――」

あるんだ、という魅優の糾弾は、しかし突如として砕けたガラスの甲高い破砕音によって掻き消された。

「――――」

瞠目し、声が詰まる。それも当然。窓を突き破って中へ入ってきたのは、ずる賢い強盗の類などではなく、そもそも人間ですらない魔性の怪物――妖魔だったのだから。

「魅優！」

橘が叫ぶ。窓際のソファーに座っていた魅優は、必然的に妖魔の近距離にいる。それも無防備な体勢で。
妖魔が咆哮を上げる。眼下の獲物を補足し、鉄すら容易く両断できるであろうその爪でもって、魅優を引き裂かんと振り下ろす。

「――――あ」

死んだ、と思った。
武器もなければ戦闘態勢に入ってすらいない。完全に不意を突かれた奇襲。ゆえに一秒後、己の肉体は三つに分割される。
その様を幻視しながら、魅優は死の恐怖を感じる間もなくその短い生を終えて――
――だが、その瞬間。

「ハッ――」

轟音の如き銃声が響き渡る。直後に肉が砕ける不快な音が鼓膜を舐め、次いで生温かい液体が魅優の小さな顔に降りかかった。それが妖魔の血であるということを理解するのに、魅優は数秒の時間を要した。

そして、自分を九死から救ってくれた彼の方へとゆっくりと振り返る。

朔夜の隣に座ったままこれまで沈黙を保っていた久我遊路は、しかしいまは何かが弾けたような狂笑を浮かべていた。手には狩猟用レベルの大口径回転式拳銃（リボルバー）、レイジングブルM五〇〇。それを片手で、しかもこちらを見向きもせずに彼は妖魔の頭部を難なく撃ち抜いていた。並みの射撃技術ではない。

だが遊路はそんなことを誇ることもなく、

「逸んなよ、まだ祭りの狼煙は上がってねえだろうが。お手つきは厳禁だぜ？」

言いながら、立て続けに発砲。次々と妖魔の頭蓋を粉砕していく。部屋中に飛び散る妖魔の血は、まるで元となった人の魂が慟哭しているかのよう。しかしそれでも遊路は止めない。中に入り込んだ都合五体の妖魔を、一切の仮借なく屠り捨てる。

そして、全ての妖魔が果てると。

「ま、狼煙としちゃこれくらいが妥当か――ンじゃ、行くとしようぜ。客を待たせんのも忍びねえし」

立ち上がり、橘を、魅優を、そして朔夜を促す。その顔に陰りはない。ここへイモータルが現れたというのなら、彼を狙ってきたこ

とは瞭然なのに。それに対する恐怖など微塵も遊路にはなかった。いや、むしろそれどころか都合が良いと、迎え入れているようにすら思える。あるいは、遊路もこの展開を望んでいたのかもしれない。だけど万一を想定して、自ら出向いてやろうと、そう考えていたのかも。

――それに、少しだけ嫉妬を覚えた。

真実遊路の性質を理解している、彼女に。

「楽しめそうか、遊路？」

「ああ。久々だね、この感じは。堪んねえよ」

狂笑と微笑――それぞれ異なる歪んだ笑みを浮かべ、遊路と朔夜は割られた窓の外へ視線を放る。外にいるのは世界でも屈指の怪物、《円環の蛇》。三百年以上誰にも敗れたことのない、不死性を有した真正の化物。それを相手にしてなお、彼らの内に湧く感情は？喜？だった。

――ゆっくりと、朔夜が立ち上がる。

一歩二歩と進み、そしてやおら振り返り。

導くように、誘うように、遊路ら三人を死地へ向かわせんと煽動の言を口にした。

「じゃあ――始めようか」

第七話

外へ出ると、果たしてそこにイモータルはいた。
金色の髪、碧色の瞳、黒いローブ、そして万人を見下す傲然とした尊大に過ぎる態度。ああ、あの夜屋上で戦った男に相違ない。
その男が、おもむろに口を開く。

「遅いぞ。玩具の分際で私を待たせるとは何事だ？」
「ハッ、早漏野郎が。焦ってんじゃねえよ」

イモータルの不遜に過ぎる言に、しかし遊路は微塵も臆していない。ベクトルは違えど、この彼もまた自尊にかけては常人の遥か上を行っている。
ゆえに、本来ならばイモータルはここで憤激しているはずだ。自尊の塊である彼は、己を同列に見られることを何より嫌う。それだけで咎人とし、抹消対象として世から葬ろうとする。事実一度は遊路をそうした理由で殺そうとした。
しかし。

「相変わらず威勢が良いな。しかし――ああ、そうでなくてはならん。阻喪した玩具など興醒めもいいところ。せいぜい私を楽しませろよ、それが貴様の存在理由なのだからな」

いまは久我遊路の在り方を是としている。理由はむろん、己が享楽のため。下種も甚だしいが、けれどそれは遊路にも共通している感情。彼らは互いが互いを無聊を紛らわせるための玩具と認識しており、戦うための理由もそこにしかない。ああ、言ってしまえば両者共に思考が常人の範疇を越えた狂人なのだ。魔術師の中でも彼らの唯我の念は群を抜いているだろう。

と――一瞬イモータルの視線が遊路から外れ、その背後に控えている朔夜へと当てられた。それ自体は別段疑問に思うようなことではないが、しかしその目に宿る感情は妙だった。初見の人間に、しかも独尊のイモータルが向けるものとしてはいささか不可解に過ぎる。

（何かやったのか、こいつ？）

彼女はずっと共にいたゆえイモータルの警戒を仰ぐようなマネはしていない――というかできないはずだ。が、しかし断言はできない。この少女は誰の物差しであっても計れない規格外の存在だ。世間一般の常識など、笑って踏み潰してしまえる。

ゆえに、遊路はこのことに関する思考を放棄した。いまさら訊いても意味はなく、知って何になるわけでもない。それはイモータルも同じだったようで、特に朔夜に言葉を投げるようなことはなく、緩やかに視線をこちらに戻した。

すると、それと同時に。

「イモータル……あなたの目的はなんですか？　なぜ、罪もない人たちを傷付けるんです！？」

一歩前に出て、魅優が詰問をぶつけた。

彼女は害ある存在を許せない性質だ。誰であろうとも、如何なる理由があろうとも、必ず相応の罰を与えんとする者。ああ、いわゆる正義の味方という奴だ。ゆえに、彼女は悪を見過ごすことはできない。

だが、仮にその悪行に止むを得ぬ理由があるのなら――いくばくかの酌量を辞さないのが天道魅優という少女である。

しかし、幸か不幸か、此度の相手はそのようなしち面倒な悲劇キャラではなかった。

「黙れ。小虫如きが私に口を利くな、視界に入るな、価値無き愚図めが」
「――――っ」
存在そのものを侮辱され、いまにも飛びかからんばかりに魅優が怒りを露わにする。
遊路はそんな魅優に苦笑しながら。
「落ちつけよ。牛かお前は？」
ペンペン、と頭を軽く叩きながら、猛っている彼女を宥める。ここで突っ込んで死なれでもしたらシャレにならない。取り敢えず下がっていてもらおう。
――などと遊路が考えると同時、やおらイモータルは腕を掲げ。
「そこな虫けら共、貴様らは邪魔だ。同種同士喰い合い果てるがいい」
瞬間、突如として地に黒い穴が空き、そこから妖魔の群れが這い出てきた。
その数実に三十前後。しかもこれは――
（さっきの雑魚とはランクが違うな。朔夜はともかくとして、おやっさんと魅優はちとヤバいか……）
魅優は単純な実力不足、そして橘はそもそも戦える体にない。この状況は少々まずい。
ふと、朔夜を見やる。さて、彼女はこの状況、どう見ているのか。
すると、ちょうど彼女もこちらに視線を向けたところだったよう

で、同時に目を合わせる形となった。

「……」

「……」

言葉は交わさない。けれど以心伝心。彼女が何を思い何を促しているのか、遊路はそれを一瞬で看破する。

――おまえがやれ。わたしは見てるから。

それが彼女の意思。

ああ、声に出していたならば魅優や橘が即座に咎めに入っていたことだろう。これは朔夜の試験。イモータルを倒すことを条件に、自分たちの仲間となる約束だったはず。

だがそもそも、彼女はまだその仲間の力量を知らない。ゆえに見せろと言っている。そして現在の久我遊路を彼女は知らない。ゆえに魅せろと言っている。

でなければ、何もしないと。

「ハッ――上等、最っ高にイカスとこ見せてやるよ。惚れても知らねえからな」

「ああ。期待してるよ」

言うと同時、妖魔が一斉に襲いかかってきた。が、遊路だけは標的外と見做され無視されている。

両脇を通過していく人外の化物共の殺意は激甚。並みの人間ならば立っていることすらできないであろうその状況下で、しかし遊路は悠然と佇立している。その瞳が見据えるは《円環の蛇》。いまの彼にとって、その挙動以外は全て些事でしかない。

睨み合う両者は、しかし言葉は交わさない。もうその段階は過ぎた。

これより先は――

『――殺す！』

双方同時に紡いだその言が開戦の合図となり、ここに、戦いの火蓋は切って落とされた。

「挨拶代わりだ、受け取りなァッ！」

轟く銃声。

凄まじい轟音とマズルフラッシュを生じさせて放たれた弾丸は三つ。型など度外視したデタラメな発砲は、しかしイモータルの腹部、心臓、頭部へと過たず正確に向かっている。その道の者が見れば発狂ものだろう。

だが。

「要らん。辞儀ならばもっとマシなものを見せろ。楽しめんだろう？　これでは」

それらの弾丸は、いずれもイモータルを害することなくその手前であらぬ方向へ弾き飛んで行った。

その怪現象を前にして、遊路は苦笑しながら。

「いきなり幻装具出しちまうのかよ？　ほんと早漏気質だよな、お前って」

「戯言を。魔術師としての戦にこれを用いずして何を使う？　異端なのは貴様だ」

そう嘯くイモータルの体からは、無数の蛇が生え出ていた。――いや、正確にはイモータルの体からではなく、そのローブから。

黒い鱗に血紅色の瞳を持った大蛇――それは明らかに自然の産物ではなく、超常の力によって編まれ形を成した幻想の存在。ゆえにあれは生物ではなく、イモータルという存在の一部。武器となる手足のようなもの。

その名を幻装具――魔術師が用いる武具の通称がそれだ。

魔術が術者の願いの具象だとするならば、幻装具とはその願いを叶えるためのアイテム、魔術に対する補助輪のようなもの。

ゆえに、その力は超常の域にある。

「では次はこちらの辞儀の番だな。戯れも良いが、早く貴様も力を見せろよ。でなければ――すぐに殺してしまうぞ？」

「――――っ」

言い終えると同時、五匹の大蛇が人一人容易く飲み込めるほど大きく口角を開いて亜音速の速さで迫ってきた。だがその軌道は直線。ゆえに回避は可能。遊路は即殺される刹那の直前に片手で側転して横へ回避し、どうにか難を逃れる。のみならず、側転しながら発砲。アクロバティックに過ぎるその曲芸撃ちは、しかし見事に大蛇の側頭部に命中し、弾かれたように一匹の大蛇が大きく仰け反った。

「ちぃっ」

だが遊路の表情は苦い。間隙を突いて反撃を成した者のそれではない。

しかしそれも当然。弾丸を食らった大蛇は死なず、且つダメージすら受けていない。ただ衝撃に仰け反っただけ。むろん他の四匹も健在だ。これで喜べるような奴がいるならば、そいつは単なる阿呆でしかない。長生きなど絶対にできないだろう。

そして遊路はそのような愚物ではなかった。されどそれが幸か不幸かは不明。なぜなら、彼は怜悧であるがゆえに、この戦況が如何

に絶望的か理解していたから。

「どうした？　息が上がっているようだが、まだ小手調べに過ぎんぞ？」

「うっせえよ、あほ」

滑稽な強がりを言って、遊路は瞬時にシリンダーを開き排莢、装填を行う。懐から弾を取り出し籠める動作に要した時間は二秒。だがその間に五匹の大蛇は遊路を喰らわんと眼前に迫って――

「づっ――――ラァッ！」

しかしその瞬間、銃把（じゅうは）で側面の蛇を殴り飛ばし、その反動で体を旋転させ捌くことに成功。――否、それだけではなく、今度は術者であるイモータルと差し向かいの体勢となっている。加え、いま彼の守りは手薄。これならば――

「逝けや、爬虫類」

トリガー。

轟音を撒き散らして射出される弾丸は、今度こそイモータルの頭蓋を粉砕して……

「――下らん。つまらんぞ小僧。貴様はその程度の価値しかない虫けらなのか？」

だがまたも、弾丸はイモータルには届かなかった。

それを成した要因は瞭然。彼の幻装具だ。

いつの間にか、さらに背から三匹の蛇が生えていた。イモータルはあれで弾丸を薙ぎ払ったのだろう。

「……、」

遊路は一度ため息を吐き、次いで頭を掻いて。

「何匹まで出てくんのよ？　それ」

そんな遊路の問いに、しかしイモータルは特段隠すこともなく。

「百だ」

簡潔な、それでいて絶望的な返答でもって応じた。

さらに。

「それとな、これらはどう足掻こうが破壊できんぞ。潰しても再生する。ゆえに、これはこう呼ばれているのだ――無限蛇（ヒュドラ）、と」

頑強に過ぎる鱗を持ち、且つ破壊しても主たるイモータルが存在する限り無限に再生する蛇――ああ、まさに神話に名高い不死再生の大蛇そのもの。

ならばこれはもう詰みだ。打つ手などない。こちらの攻撃は通じず、あちらだけが一方的に攻め立てるこれはもはや戦いではなく、絶対的な強者による戯れ。

であれば、ここは退避すべきだろう。それが賢明な判断であり、正しい決断だ。

しかし。

彼は聡明でありながら蛮勇を揮う生粋の危険嗜好者。死線の中に身を置くことに何よりも悦を感じる正真の異端者である。

ゆえに。

「ハッ。ンなセンスのねえ名ァ付けてドヤ顔してんじゃねえよ。――不死？　再生？　ああそうかい、そりゃまた大層な肩書き持って凄ぇなァ。興味ねえけど」

くるくると銃を指で回しながら、嘲りの笑みを浮かべて彼は言う。

「楽しみたいんだよな？　退屈は嫌いなんだよな？　いいぜ、だったらそれらしく振る舞ってやる。けどな――笑い死ぬ覚悟、しとけよ？」

「――――」

遊路のその不可解な言に、イモータルがわずかに身構える。彼もまたこれで終わりなどとは思っていない。

ああ、確かにそこらのチンピラが相手だったならば確かに警戒は不要だろう。だがいまイモータルと相対している彼はそのような取るに足らない虫けらではない。先の戦いで、油断していたとは言え《円環の蛇》を拘束し難なく逃げ果せた男だ。それだけですでに尋常の域にない。加え、彼はそもそもこのように銃器を揮って戦う者ではなく、その本領は人智となった神秘の行使に他ならない。

すなわち――

「真正（アルカナ）――」

位相のズレた声が闇夜に響く。

それは世界という外側に向けて放たれたものではなく、己が内側――魂に呼びかけたもの。

久我遊路という存在が何を求め、何を欲し、何を願っているのか。

その祈りの真名が、いまここに紡がれる。

「――譫妄道化・諧謔物語（イディオ・サヴァン・ファルス）」

第八話

「――譫妄道化（イディオ・サヴァン・ファルス）・諧謔物語」

瞬間、遊路の右頬の赤いタトゥーが不気味に脈動し、直後首を伝い腕を駆け抜け銃に絡みつく。さらに同時、無手となっているもう片方の手、その掌で閃光が迸り刹那の間に身の丈を越える巨大な漆黒の大鎌が顕現した。

その鎌がもたらす圧倒的な威圧感は、間違いなく世の理を越えた超常の域にある。ならばこれこそが――

「……貴様の幻装具、か。ふん。小賢しい真似をする割には、豪快な武器を取り出したものだな。不適当ではないか？　それは」

「さてな。そいつがどうかは、テメェ自身で味わってみろよ」

イモータルの皮肉を軽く流し、遊路は大鎌の巨重をものともせず片手で軽々と持ち上げ肩に担いで見せる。だが彼の体躯はどう見ても細身であり、この巨重武器を自在に操れるとは到底思えない――あくまで常識という観点からすれば。

魔術師は状況に応じて己が身を最適な存在（カタチ）へと変生することが可能なのだ。むろん、己ならば成せると激甚な意志で信じることができる者だけだが。

そして、遊路はそれを成せる者の一人。とは言っても、身体能力の強化など基本に過ぎない。その道を極めた狂信者たちは、何の道具も無しに空中浮遊や水中呼吸を可能としたと言われている。

ともあれ、遊路の身体能力はいまや人の域にない。ああ、それこそ人外の化物と呼ぶに相応しい位階まで彼は駆け上がっている。

ならば、ここからが本当の勝負と言えるだろう。

「行くぜェッ！」

疾駆。蹴り飛ばされた地面は陥没し、その破片が宙に舞い上がる頃にはすでに遊路は己が間合いに踏み込んでいた。

「ぬっ――――」

イモータルの目がわずかに見開かれる。遊路の身体能力が向上したことは彼も察知していたが、しかしその予想のさらに上を遊路は行っていたのだ。

――半円の軌道を描く大鎌が迎撃に走った大蛇五匹を纏めて薙ぎ払う。だがそれだけではイモータルに傷を与えることは叶わない。彼の背から生え守護している三匹の大蛇、まずはあれをどうにかしなければ。

「ハッ――」

しかし遊路は構わず銃を乱射した。一、二、三発――射出されるは大蛇の数と同数の銃弾。されど如何に威力が高かろうと通常弾ではあの蛇を倒すどころか傷一つ付けることも能わない。それはこれまでの戦いで証明済みのはず。

ならばこれは何の真似か。

その謎は、刹那の後に明かされた。

「な――にぃ！？」

驚愕の声が響き渡る。それも遊路のものではない、《円環の蛇》の名を冠するイモータルの声が。

しかしそれも無理はない。

なぜなら――イモータルを守護するはずの大蛇三匹が、遊路の放った銃弾によって全て粉砕されたのだから。

そして。

「あのなァ、調子に乗り過ぎなんだよ、お前」

「――――――」

イモータルの顔が凍りつく。

さらに間を詰めていた遊路は、すでにイモータルの目睫、眼下にまで迫っていた。

それにイモータルが気づくと同時、下方から命を刈り取らんと死の刃が舞い上がる。その軌道上にはイモータルの首が。

だが。

「ぐぅおおおおおおおおおお――――ッ！！」

咆哮。次いで血の飛沫が中空に舞う。しかしその量は些少。加えてこの軽い手応え――遊路は自身の一撃が不発に終わったことを悟った。

事実その通り、イモータルは驚異的な反応速度でもって身を仰け反らせ、首を数センチほど切り裂かれるだけに止めていた。致命傷――頚動脈切断まであともうわずかだったというのに。

けれど遊路は微塵も消沈していなかった。それどころか勝機を掴んだとばかりに笑みを浮かべている。

その根拠は……。

「避けたな。それも思いっきり。ってことはやっぱお前、完全な不死ってワケじゃねえんだな」

そう。

そもそもイモータルが噂通りの不死であるのなら、銃弾も先の剣戟も防ぐ、躱す必要などどこにもない。一身に受けながら悠々と遊

路を殺しにかかればいいのだ。
それを避けていたということは、つまりそういうこと。
確信を持って遊路はそうと断じたが、しかしイモータルは特にその言を気にすることなく首から流れ出る血を手で拭い、次いで振り返ってビルの壁に突き刺さっている剣へと視線を当てた。

「なるほど。その鎌が貴様の幻装具だと思い込んでいたが、違ったようだな。……よもや銃を変質させて幻装具を撃つとは、私もさすがに読み切れなんだ。ああ、それについては誇るがいい。見事だ」

この傲岸不遜を絵に描いたような男からあり得ない賛辞が飛ぶ。それだけのことを遊路はやったのだ。
原則として、幻装具を複数創造することはできない。幻装具とはその者が持つ純然真正の願いを叶えるための道具なのだから、それも当然だろう。
しかし遊路はその幻装具を四つ使用した。しかもその内三つは通常武具である拳銃から撃ち出される始末。如何に超常の力を揮う魔術師と言えど、これは度が過ぎている。
では、この奇跡を彼はどうやって成したのか。その謎は――

「ハッ。テメェが勝手に勘違いしただけだろ。オレは一度だって、鎌(これ)がオレの幻装具だと言った覚えはねえぜ？」
「ああそうだな。ゆえに、気づくのが少し遅れた。その幻装具が、貴様の魔術によって編まれた物だとな」

そう。遊路は幻想具など顕現させていない。彼が発現させたものは己が魔術のみ。つまり、いま遊路が手にしている鎌も、そして銃から放たれた三本の剣も、イモータルが言ったように彼の魔術の効力によって形成されたものに過ぎない。
すなわち、それこそが彼の魔術の能力――

「複製……か。そのような能力を持った魔術師はこれまでにもいくらかいたが、しかしここまで精巧に真似られた者はいなかったぞ」
「当たり前だろ。全部本物なんだからな」

何？　とイモータルが訝しむ前に、遊路は引き金を引いた。
銃口から射出されるは通常の鉛弾ではなく、斧や剣、槍の類。しかもそれらが残らず幻装具であった。
だがそれらは、元々当てる気などなかったのか、イモータルの体を傷つけることなく通過していった。
それに、イモータルは目を細め。

「……解せんな。何のつもりだ？　わざわざ己の手の内を晒すなど、気でも触れたか？　あるいは余裕であると？」
「ああ、余裕だね。その気になりゃ今すぐにでもお前をぶち殺せる」

あっけらかんと遊路は即答する。膨れ上がるイモータルの殺意に、しかし彼は微塵も恐怖を感じていない。むしろ心地よいとでも言わんばかりに、涼しげな笑みを浮かべていた。

「けどよ、本気のお前とやり合わなきゃ楽しくねえんだよ。魅優やおやっさんと違って、オレは結果よりも過程を重視する性質でね。ぶっ殺してはい終わり、じゃ満足できねえんだ」

だから、と遊路は言って。

「ここからは本気でやろうぜ。加減は抜きだ。互いに全身全霊、正真の殺し合いしようや」

油断や不意打ちで片がつく戦いなど拍子抜けも甚だしい。持てる

力全てを出して、生と死の境界で殺し合う――ああ、それこそが久我遊路の願望（アルカナ）なのだ。
ゆえに、この展開だけは曲げさせない。誰に咎められようと否定されようと、譲れないのだ。彼はこの時この瞬間に得られる生の実感のみを得んがために生きているのだから。

「……」

それに、イモータルはしばし虚を突かれたかのように茫然と立ち尽くし、そして。

「くっくっ――はははははははははははははははははははははッ――――――！！」

腹の底から、大笑した。
堪らない堪らない――そう言わんばかりに。

「はははは、はははははははははははっ――――――ああ、良い。良いぞ小僧。存分に殺し合おう。ここからは出し惜しみ無しだ。全力で行かせてもらう。だがその前に名乗れ、小僧。貴様の名は永劫記憶に留めるに値する」

数百年という生の中で、イモータルはいま初めて自身以外の存在を認めていた。塵でも、虫でも、玩具でもない――得難い好敵手として。
そして、それは遊路もまた同じだった。

「久我遊路だ。覚える必要はねえぜ、どうせここで死んじまうんだからな」
「ほざけ。散るのは貴様だ、小僧」

一瞬、わずかに弛緩した空気が両者の間に流れる。それこそ友と邂逅した時のような。
しかし、それも刹那の後には消え失せ。
イモータルの破壊された大蛇が再生と共にその数を倍に増やし、遊路が鎌を構えた瞬間――

『――行くぞォッ！！』

彼らは申し合わせたかのように、同時に地を蹴り激突した。

第九話

「はあああああああああああああ――――――ッ！！」

怒号が響き渡る。

幼い子供特有の高いその声は、しかし無邪気なかけ声などではなく、そこには必滅の意志が籠められていた。

その意志を向ける相手は、人ならざる魔性の怪物、妖魔である。

この戦いが始まって約十五分――当初三十ほどいた妖魔は、現在その数を二十五としている。すなわち三分で一体倒している計算だ。なるほど、幼いながらに遊路の片腕を務めるだけあって、彼女の実力はかなり高い次元にあると言えるだろう。以前の戦より足枷がない分その動きにキレがある。真、大したものだと称賛されるほどに。

しかし――

「くっ、は……っ」

妖魔の爪撃が魅優の脇腹を裂いていく。

焼けるような、刺すような痛みに悲鳴を上げそうになるも、魅優はそれを噛み殺し即座に反撃。体を旋転させ、己を取り囲んでいる妖魔共を引き剥がす。が、数秒と経たぬ内にまたも纏わりつかれてしまう。魅優の一手は戦況を打破するには至らなかった。

趨勢（すうせい）は最悪だった。

すでにその身には致命とまでは言わぬまでも、見過ごせないレベルの傷がいくつも刻まれている。五体の妖魔討滅も、楽に成せたわけではない。それなりの代価を払ってどうにか成せていたのだ。

だが、前回の時では足枷があっても彼女はここまで苦戦などしていなかった。むろん先に述べている通り、彼女の動きに問題はない。

ならば、これは……

（こいつら……前よりずっと強くなってる）

肩で息をしながら、魅優は確信する。この妖魔共が、イモータルによってその力を強化されていると。

「っ……」

思わず目尻に涙が滲む。恐怖を感じたわけではない。ただ納得ができなくて。罪のない人々を平然と手にかけるような外道が、強大な力を得られるこの不条理が許せなくて。そして何より己の非力さを呪った。こんな奴らに押されている自分を。

「負けない……」

強靭なる意志の断片が、声となって零れ出る。

――負けてたまるものか、と。

自分たちが負けたら、あの外道は延々と同じことを繰り返し続ける。無辜の人々を殺して殺して殺して殺して――また殺す。許せるはずがないだろう、そのような悪行。

目の前で苦しむ人を見たくない。皆が幸せに、笑って生きていてくれたらと思う。

だから――

「私は負けない！！」

吠え、妖魔に踊りかかる。

「だあああああ――――――ッ！！」

上段から叩き下ろされる剣戟。それが妖魔の腕を切断する――否、半分ほど裂いたところで止まってしまう。以前とは保有する魔力が段違いだ。強度で言えば紙切れと石塊（せっかい）ほどに違う。

ゆえに一太刀で決められない。二撃三撃でも足りず、そうしている間に別の妖魔が襲いかかってくる。

「しまっ――」

唯一の武器を人外の筋肉でもって挟み込まれ、抜き取ることができない。そしてその致命とも言える隙を見逃すほど、妖魔も愚かではなく。

「あ――――」

魅優の顔が戦慄に染まる。眼前には妖魔の爪牙。脳裏に過るは死の一文字。

咄嗟に目を閉じて直後に襲いくる痛みに耐えようとして――

「うおおおおおおおおオオオオオオっ！」

突如横から割って入った橘によってどうにか救い出される次第となった。

だが、だからと言ってホッと胸を撫で下ろすこともできない。いや、彼女にとってはむしろこちらの方が最悪と言える。

「橘さん、そんなっ……」

魅優を死から救った代償として、橘は背中を妖魔の爪に抉られ深い傷を負っていた。Tシャツの背中部分が真っ赤に染まっていくほどの出血量。これは直ちに治療しなければ致命傷となる。しかしこ

の状況下で治療などできるはずも……
にも拘らず、顔を青ざめる魅優に対し、橘は太い笑みを浮かべて。
「余計な、ことを……気にするな。前を見ろ。希望を抱け。誰かを守る戦において必要なのは、それだけだ」
脂汗を流しながら、息を乱しながら、けれどそれでも彼は弱音を、泣き言を吐かない。
未だ四肢が動く魅優と違い、彼は最初から片目片足が不自由。視界と動きを限定された状態で、戦える身でないにも拘わらず自らを囮にすることで彼は先程から魅優の負担を軽減させていた。自分にできるのはそれくらいしかないからと。
そこらの男ならば、冗談ではないと断じているだろう。大の男が十を過ぎたばかりの小娘のサポート役に徹するなど羞恥（しゅうち）の極みだ。そしてそこは橘とて同じ。女を、子供を守るのは漢の務め。ゆえにこの状況に納得などしているはずがない。
だが、彼は己が誇りすら捨てることができる。遠く彼方にある勝利――皆が笑ってそれを掴むためならば。
「……っ」
嫌だ、と魅優は思った。
この人を失いたくない。死んでほしくない。
そう思うのに、どうしても喪失の恐怖が拭えない。怖くて体が震える。まともに剣を構えることもできない。
――妖魔が迫る。
魅優は真っ向から迎撃しようとするが、しかし横合いからも襲われ地面を無様に転がっていく。腕が痛い。折れたかもしれない。いや、痛いのは全身だ。どこもかしこも痛くて堪らない。
橘が何かを叫ぶ。鼓膜が役割を放棄したのか、よく聞き取れない。

見れば、橘が妖魔に殴りかかっていた。彼もまた魔術師。確かにその膂力は常人のそれを上回っているが、しかし妖魔と殴り合いをして勝てるほどではない。
なのにそれを敢行した。己を守らんとして。

「やめ、て……」

見る見る血塗れになっていく橘。ただそれを見ている自分。絶望はいまここに。
止めて。お願い。殺さないで。奪わないで。その人を傷つけないで。
その願いも空しく橘が崩れ落ちる。すでに虫の息だ。このままでは本当に死んでしまう。けれど自分にはどうすることもできなくて、救うことができなくて。
だから。

「だれか――助けて……っ」

その懇願。切願は、しかし――叶えられる。

「ああ。いいよ」

神の慈悲ではなく、死神の戯れによって。

「――無間乖離（むげんかいり）」

紡がれるは死神の祈り、それを成すための幻装具（オモチャ）。
直後、何処からか淡い光を帯びた花弁らしきものが現出した。そ

の数は不明。余りにも膨大過ぎて、そして次々と際限なく分裂しているから。

「これ、は……」

何なのか、と魅優は状況を忘れて誰に問うでもなく呟いた。
舞い散る桜のような、降りしきる粉雪のような。そんな美しい情景を連想させるそれは、しかしその根本はまるで異なる忌避すべきものだと魅優は本能的に感じ取った。
そして、その洞察を褒めたたえるかのようにそれがわずかに蠢いた、次の瞬間――天道魅優の視界（セカイ）にいた害悪（ようま）は、一つ余さず微塵に刻まれ灰燼に帰した。

「――――――」

絶句。
言葉を失うという意味を、魅優は初めてこの時理解した。
何だこれは。何が起こったのか。
意味が分からず、危機が去ったことにも素直に喜べない。
――ふと、視線を上げる。
『橘商店』、その屋根の上に、彼女はいた。
風に棚引く漆黒の髪。鋭すぎる闇より黒い瞳に、非の打ちどころのない絶世の如き美貌。天道魅優が満身創痍になってようやく数体倒すのが限界だった妖魔らを、指一本動かさず殲滅させた、真実最強の死神――不破朔夜がそこに。
その極大の人非人（にんぴにん）である彼女が、不意に魅優へと視線を落として。

「頑張ったな、魅優。可愛かったよ」

そんな、彼女の祈りを嘲弄するような称賛の言を口にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4230y/

幻想のアルカナ

2011年11月23日16時54分発行